

直刀原遺跡 河原林遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓2期地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県下伊那地方事務所
長野県飯田市教育委員会

直刀原遺跡 河原林遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓2期地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県下伊那地方事務所
長野県飯田市教育委員会

序

西部山麓線も部分的に供用開始されており、両側には早くも新築の住居が目立ちはじめました。道路整備に伴った開発の早さには驚きを禁じ得ません。

さて、この西部山麓線も、数年後に旧市に接続の目途が立ってまいりました。工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査も昭和60年から始まり、当報告書で5冊めに当たります。前4冊の報告にありますが、各遺跡で古代人の住居址が発見され、現在私たちが居住している場所ほとんどに、古代人の生活痕跡が残っていると想像できます。

開発と埋蔵文化財の保存とは相反する関係にあり、次善の策として発掘調査を実施し、私たちの先祖が残した文化の足跡が、この報告書に形を変えて永久保存されることとなります。

この報告書から、私たちが我々の遠い先祖の生活文化を顧みてみたいものだと思います。そして何かを感じ、現代に生かされたら、古代文化の心が蘇ったものでありましょう。皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。

終りに、調査実施にあたり様々なご協力をいただいた関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成4年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例 言

1. 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓2期地区道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地直刀原遺跡および河原林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は下伊那地方事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。なお、委託契約にあたっては直刀原遺跡と河原林遺跡が該当するが、河原林遺跡で代表した。
3. 調査は、平成3年11月5日～11月26日に直刀原遺跡の調査を実施し、また河原林遺跡の発掘調査を平成3年11月29日～平成4年2月12日まで実施した。続いて平成3年度末まで整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 直刀原遺跡の今次調査地点は、平成2年度に西部山麓2期地区道路建設に伴い調査された地点と近接しており、連続する遺構番号を付した。
5. 発掘調査および整理作業においては、直刀原遺跡は略号CTHを、河原林遺跡は略号KWHを一貫して使用した。
6. 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物および写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、佐々木嘉和・馬場保之・渋谷恵美子が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行った。
8. 本書に掲載された図面類の整理は馬場・渋谷が、遺物実測・写真撮影は渋谷があたった。なお、同作業実施にあたり、佐々木・佐合英治・吉川豊および整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、馬場・渋谷が行ない、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕および擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
12. 本書に関連する出土品および諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例言	
目次	
I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
① 直刀原遺跡	
② 河原林遺跡	
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	10
1. 直刀原遺跡	10
1) 竪穴住居址	10
① 3号住居址	
2) 土坑	11
① 土坑86 ② 土坑87 ③ 土坑88	
3) 溝址	12
① 溝址4 ② 溝址5 ③ 溝址6	
4) 集石	13
① 集石2	
5) その他	13
① 柱穴群	
② 遺構外出土遺物	
2. 河原林遺跡	16
(1) 調査区の概要	16
(2) 遺構と遺物	21
1) 竪穴住居址	21
① 1号住居址	
2) 掘立柱建物址	23

① 掘立柱建物址 1

3) 土坑				24
(1) 土坑 1	(2) 土坑 2	(3) 土坑 3	(4) 土坑 4	
(5) 土坑 5	(6) 土坑 6	(7) 土坑 7	(8) 土坑 8	
(9) 土坑 9	(10) 土坑 10	(11) 土坑 11	(12) 土坑 12	
(13) 土坑 13	(14) 土坑 14	(15) 土坑 15	(16) 土坑 16	
(17) 土坑 17	(18) 土坑 18	(19) 土坑 19	(20) 土坑 20	
(21) 土坑 21	(22) 土坑 22	(23) 土坑 23	(24) 土坑 24	
(25) 土坑 25	(26) 土坑 26	(27) 土坑 27	(28) 土坑 28	
(29) 土坑 29	(30) 土坑 30	(31) 土坑 31	(32) 土坑 32	
(33) 土坑 33	(34) 土坑 34	(35) 土坑 35	(36) 土坑 36	
(37) 土坑 37	(38) 土坑 38	(39) 土坑 39	(40) 土坑 40	
(41) 土坑 41	(42) 土坑 42	(43) 土坑 43	(44) 土坑 44	
(45) 土坑 45	(46) 土坑 46	(47) 土坑 47	(48) 土坑 48	
(49) 土坑 49	(50) 土坑 50	(51) 土坑 51	(52) 土坑 52	
(53) 土坑 53	(54) 土坑 54	(55) 土坑 55	(56) 土坑 56	
(57) 土坑 57	(58) 土坑 58	(59) 土坑 59	(60) 土坑 60	
(61) 土坑 61	(62) 土坑 62	(63) 土坑 63	(64) 土坑 64	
(65) 土坑 65	(66) 土坑 66	(67) 土坑 67	(68) 土坑 68	
(69) 土坑 69	(70) 土坑 70	(71) 土坑 71	(72) 土坑 72	
(73) 土坑 73	(74) 土坑 74	(75) 土坑 75	(76) 土坑 76	
(77) 土坑 77	(78) 土坑 78	(79) 土坑 79	(80) 土坑 80	
(81) 土坑 81	(82) 土坑 82	(83) 土坑 83	(84) 土坑 84	
(85) 土坑 85	(86) 土坑 86	(87) 土坑 87	(88) 土坑 88	
(89) 土坑 89	(90) 土坑 90	(91) 土坑 91	(92) 土坑 92	
(93) 土坑 93	(94) 土坑 94	(95) 土坑 95	(96) 土坑 96	
(97) 土坑 97	(98) 土坑 98	(99) 土坑 99	(100) 土坑 100	
(101) 土坑 101	(102) 土坑 102	(103) 土坑 103	(104) 土坑 104	
(105) 土坑 105	(106) 土坑 106	(107) 土坑 107	(108) 土坑 108	
(109) 土坑 109	(110) 土坑 110	(111) 土坑 111	(112) 土坑 112	
(113) 土坑 113	(114) 土坑 114	(115) 土坑 115		

4) 溝址 57

① 溝址 1

5) 集石土坑 58

① 集石土坑 1	② 集石土坑 2	
6) その他		59
① 柱穴群		
② 遺構外出土遺物		
IV まとめ		62

挿 図 目 次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2	調査地点および周辺地図	6
挿図 3	CTH 遺構全体図	9
挿図 4	CTH 3号住居址	10
挿図 5	CTH 土坑86・87・88	11
挿図 6	CTH 溝址 4	12
挿図 7	CTH 溝址 5・集石 2	12
挿図 8	CTH 集石 2	13
挿図 9	CTH 周辺柱穴平面図(1)	14
挿図10	CTH 周辺柱穴平面図(2)	15
挿図11	KWH 調査区概要図	17・18
挿図12	KWH 遺構全体図(1)	19
挿図13	KWH 遺構全体図(2)	20
挿図14	KWH 1号住居址	22
挿図15	KWH 掘立柱建物址 1	24
挿図16	KWH 土坑 1～13・55	25
挿図17	KWH 土坑14～32	30
挿図18	KWH 土坑33～46	34
挿図19	KWH 土坑47～54・56～60	38
挿図20	KWH 土坑61～74	42
挿図21	KWH 土坑75～89	46
挿図22	KWH 土坑90～103	50
挿図23	KWH 土坑104～115	54
挿図24	KWH 溝址 1	57
挿図25	KWH 集石土坑 1・2	58

挿図26	KWH	周辺柱穴平面図(1)	59
挿図27	KWH	周辺柱穴平面図(2)	60
挿図28	KWH	周辺柱穴平面図(3)	61
挿図29	KWH	周辺柱穴平面図(4)	61

図 版 目 次

第1図	CTH	3号住居址、土坑86、遺構外出土遺物	64
第2図	KWH	1号住居址出土土器	65
第3図	KWH	1号住居址、掘立柱建物址1、土坑5・10・13、溝址1出土遺物	66
第4図	KWH	遺構外出土遺物	67

写真図版目次

図版1	CTH	3号住居址 同炉址
図版2	CTH	3号住居址周辺 調査区北東隅より 土坑86・87・88
図版3	CTH	溝址4 溝址5 集石2
図版4	CTH	3号住居址 土坑86 遺構外出土土器・石器
図版5	KWH	1号住居址 同埋甕
図版6	KWH	1号住居址炉址
図版7	KWH	掘立柱建物址1 溝址1 同断面
図版8	KWH	集石土坑1 集石土坑2 A区西より
図版9	KWH	B区西より B区中央 B区南より
図版10	KWH	C区北より D区北より E区
図版11	KWH	F区 H区 I区
図版12	KWH	J区 K区 L区
図版13	KWH	1号住居址出土土器・石器 掘立柱建物址1出土石器
図版14	KWH	土坑 溝址1 遺構外出土土器・石器
図版15		重機作業風景 発掘作業風景

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

飯田市西部の中央アルプス山麓ざわは、果樹園が主体の農業地帯である。近年の農業経営上、車を使っての農作業が不可欠の状況となっているが、この地帯の道路は不十分なもので、南北方向に走る主要な道路は国道153号線のみであり、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区・伊賀良地区・上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。

計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農政部局においてなされ、具体的に建設へと至った。

その結果飯田市西部の山本・伊賀良地区の活性化を目的とした農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区の建設工事は、伊賀良地区南西端から1期工事として着手された。

それにかかわる埋蔵文化財の調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の3遺跡、平成元年度に2期工区の細田北遺跡、2年度に3期工区の大原・直刀原遺跡が行なわれた。

引き続き、平成3年度において、下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の協議を基に、発掘調査実施についての委託契約を締結した。その契約により現地での発掘調査に着手した。

2. 調査の経過

① 直刀原遺跡

今回の調査は、平成2年に調査を行った直刀原遺跡B区の市道をはさんだ反対側の毛賀沢川寄りの地域であり、A区とした。（『直刀原遺跡』1991年を参考）

11月5日より発掘調査を開始した。人力により表土を除去し漆黒土まで掘り下げ、地中の層序確認のため、3本のトレンチをあけた。遺構検出面まではかなり深い状況であり、一旦作業を中止し、重機により掘り下げた後、調査を再開した。川沿い約7mまでは、川の氾濫等によりかなり大きな石が埋まった状態となっている。さらに調査区内には簡易水路が通っているため、この北側部分より調査に入る。遺構検出面の黄色砂質土は道路側から緩やかに傾斜しており、最深部で約1.6mあり、溝址5が東西に走り、荒れた状態であることが予想されたが、縄文時代中期の遺物と共に、住居址・集石・溝址および土坑群が確認された。

引き続き、簡易水路の反対側について行い、土坑を検出した。

遺構掘り下げ後、写真撮影・実測を行い、11月26日に現地での作業を終了し、飯田市考古資料館において、出土遺物・図面類の整理作業に入った。

② 河原林遺跡

今回の調査地点は、毛賀沢川の南西側の標高640～650mの扇状地上で既成の道路を一部含む約200mの範囲にあたる。

果樹園部分については収穫後に、また調査区中央に既成の道路が通っているという事情により、前後二度に亘って調査を実施し、便宜上、A～L区の調査区を設定した。それぞれの調査区については後述する。

前半は、平成3年11月29日に重機による表土剥ぎを行い、30日より発掘調査を開始した。工事の日程上、毛賀沢川への架橋を優先するというので、川沿いから調査に入る。縄文時代中期の住居址1軒・集石土坑および土坑群を検出し、随時、掘り下げ・写真撮影・実測を行い、12月10・17日の両日ジャステックにより航空測量を行い、現地作業を終了した。

後半は、果樹伐採後、2月5日より調査を開始する。掘立柱建物址1軒・土坑群・溝址1・集石土坑等を確認し、掘り下げ・航空撮影・実測後、前半同様、ジャステックにより航空測量を行い、平成4年2月12日には全ての作業を終了した。 (渋谷恵美子)

3. 調査組織

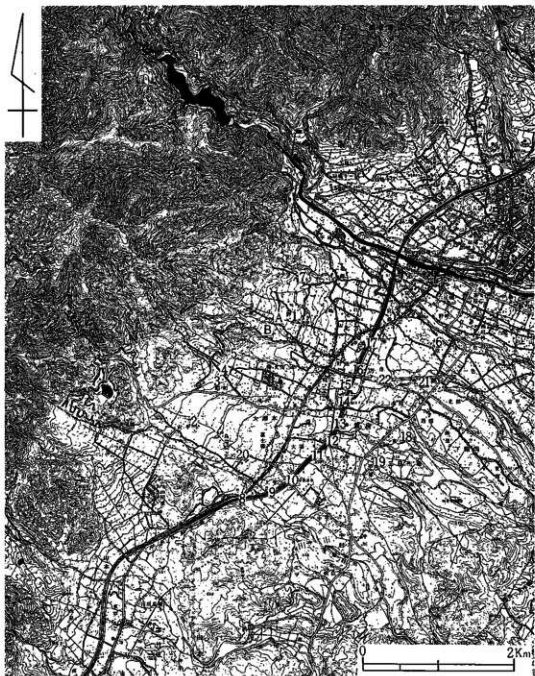
1) 調査団

調査担当者	小林 正春
調査員	佐々木嘉和・佐合 英治・吉川 豊・馬場 保之・渋谷恵美子
作業員	市瀬 長年・木下 傳・木下 当一・久保田美津子・久保田やよい 塩沢 澄子・清水 恒子・菅沼和加子・関口みさ子・高橋収二郎 滝上 正一・塚原 次郎・中平 隆雄・細田 七郎・松下 成司 松下 直市・松下 真幸・森 章
整理作業員	池田 幸子・伊原 恵子・金井 照子・金子 裕子・唐沢古千代 唐沢さかえ・川上みはる・木下 早苗・木下 玲子・柳原 勝子 小池千津子・小平不二子・小林 千枝・斎藤 徳子・渋谷千恵子 田中 恵子・筒井千恵子・丹羽 由美・萩原 弘枝・原沢あゆみ 樋本 宣子・平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子・牧内喜久子 牧内とし子・牧内 八代・松本 恭子・三浦 厚子・南井 規子 宮内真理子・森 信子・森藤美和子・吉川 悦子・吉川紀美子

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長)
中井 洋一 (社会教育課文化係長)
小林 正春 (社会教育課文化係)
吉川 豊 (同 上)
馬場 保之 (同 上)
篠田 恵 (同 上)
渋谷恵美子 (同 上)



- | | | | | |
|-----------|---------------|-----------|------------|----------------|
| A. 直刀原遺跡 | B. 河原林遺跡 | | | |
| 1. 大原遺跡 | 2. 飯田垣外遺跡 | 3. 火振原遺跡 | 4. 梅ヶ久保遺跡 | 5. 細田北遺跡 |
| 6. 西の原遺跡 | 7. 立野遺跡 | 8. 与志原遺跡 | 9. 上の平東部遺跡 | 10. 寺山遺跡 |
| 11. 六反田遺跡 | 12. 大東遺跡 | 13. 酒屋前遺跡 | 14. 滝沢井尻遺跡 | 15. 小垣外(辻垣外)遺跡 |
| 16. 三妻瀬遺跡 | 17. 上の金谷遺跡 | 18. 中島平遺跡 | 19. 宮ノ先遺跡 | 20. 鳥屋平遺跡 |
| 21. 殿原遺跡 | 22. 小垣外・八幡面遺跡 | | | |

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西2～4kmに位置し、北西半分は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上、東南半分は扇状地を載せている段丘上にあり、両者が連続した地形上に立地している。

直刀原遺跡・河原林遺跡は、飯田市北方に位置する遺跡である。この地域は山麓の扇状地上部の、広大な東向きの斜面にある。北川斜面の下部で字新井に続き、南西側は小さな谷をはさんで平成2年度調査の大原遺跡である。北西側は山が迫り、南東側は斜面が緩くなり野池・山口に続く。調査地点は、標高640mの毛賀沢川をはさんで北側と南側にそれぞれ位置する。両者を合わせた調査区全長は約300mである。

調査範囲は、川沿いということもあり、また三六災害後に土取り場となった所で、保存状態は良好とはいえない。

2. 歴史環境

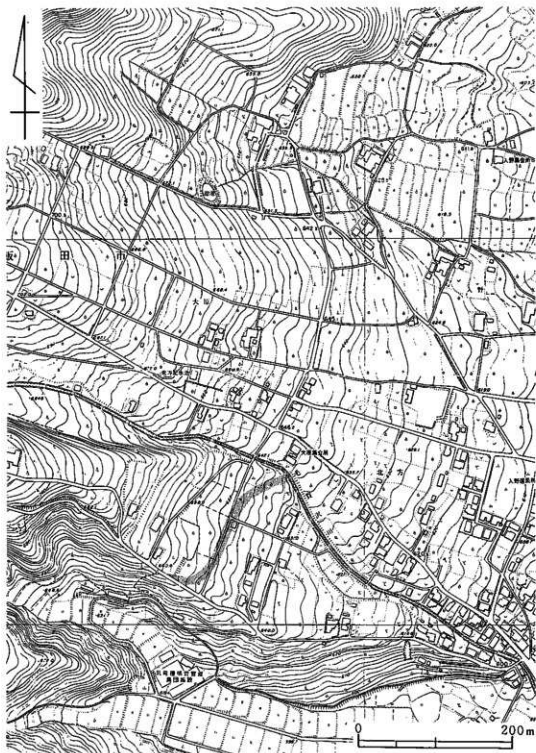
伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といってよく100余遺跡を数える。調査がなされた遺跡は、当広域農道に伴う発掘調査で飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡(注1)、細田北遺跡(注2)、大原遺跡(注3)、直刀原遺跡(注4)、学術調査による西の原遺跡(注5)、立野遺跡(注6)、中央自動車道にかかる発掘調査で与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外(辻垣外)・三遊淵・上の金谷各遺跡(注7)、諸開発に伴い中島平(注8)・宮ノ先(注9)・酒屋前(注10)・鳥屋平(注11)・殿原(注12)・八幡面・小垣外(注13)・下原(注14)等の各遺跡である。

縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構等が発見され、飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

特に本農道の先線に位置する立野遺跡は戦後まもなく数度の調査がなされ(注6)、縄文時代早期押型文土器の標式遺跡である。しかし遺跡は耕地整理・土取り等により消滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴う各遺跡の調査では、各期の住居址等の遺構が調査され、扇状地中央部付近の遺跡状態が明確にされた。

農業構造改善事業に伴う、中島平遺跡では縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の遺構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡の在り方が注目された。



直刀原遺跡

河原林遺跡

挿図2 調査地点および周辺地図

伊賀良地区内の古墳は52基（注15）が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川兩岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳がわずかに見られる。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名前が見える。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるが、その所在は確認されておらず、位置については諸説があり、将来の研究課題といえる。（注16）

中世に入ると伊賀良庄の記録（注17）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り、北条氏滅亡後は小笠原氏の所領となり、小笠原氏繁栄の基盤の一つとなった地区である。また当遺跡の西方約500mには桜山城跡があり、戦国期においても何等かの意味を持った地としての位置付けもなされる。

このように伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地といえることができる。

こうした歴史背景のある伊賀良地区における直刀原遺跡・河原林遺跡は、それら伊賀良地区全域を見下ろす地にあり、地区内で展開された各時代の様々な人々の生活を見続けてきた場所である。このような高所まで居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる。

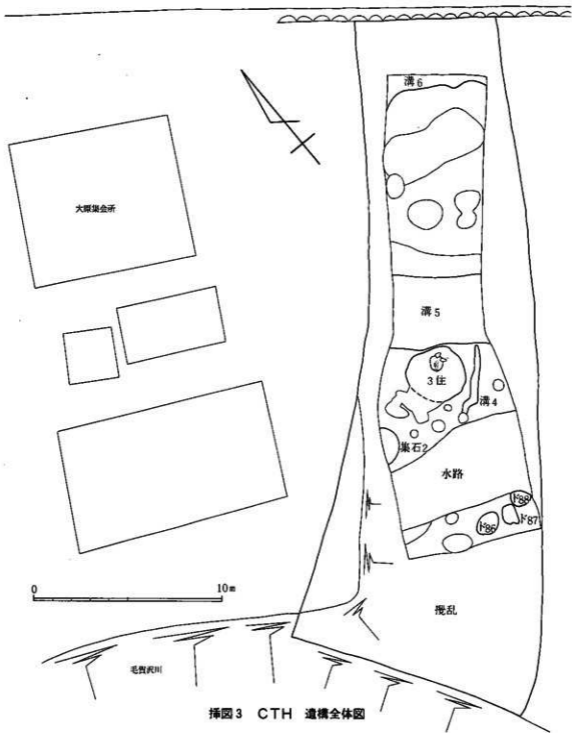
（佐々木嘉和）

注

1. 飯田市教育委員会 1987 『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』
2. 飯田市教育委員会 1990 『細田北遺跡』
3. 飯田市教育委員会 1991 『大原遺跡』
4. 飯田市教育委員会 1991 『直刀原遺跡』
5. 伴信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』
6. 神村 透 1968・69 「立野式土器の編年の位置に付いて(1)～(7)」
『信濃』20巻10号～21巻7号
神村 透 1982 「立野式土器の編年の位置に付いて(完)」『信濃』34巻2号
7. 岡田 正彦 他 1972 『中央道調査報告-飯田市内その2-』長野県教育委員会
8. 飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』
9. 飯田市教育委員会 1978 『伊賀良宮ノ先』
10. 飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』
11. 飯田市教育委員会 1983 『鳥屋平』
12. 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
13. 飯田市教育委員会 1988 『小垣外・八幡面遺跡』
14. 飯田市教育委員会 1989 『下原遺跡』

- | | | | |
|-----------|------|-----------|-----------|
| 15. 市村 成人 | 1955 | 『下伊那史』第2卷 | 下伊那史編纂委員会 |
| 16. 市村 成人 | 1961 | 『下伊那史』第4卷 | 下伊那史編纂委員会 |
| 17. 市村 成人 | 1967 | 『下伊那史』第5卷 | 下伊那史編纂委員会 |

道 路



挿図3 CTH 遺構全体図

Ⅲ 調査結果

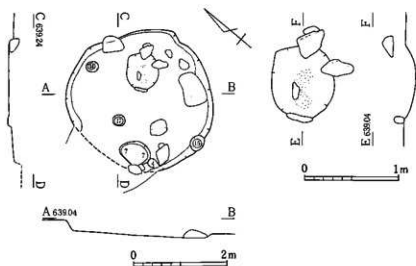
1. 直刀原遺跡

1) 竪穴住居址

① 3号住居址 (挿図4、第1図)

調査区の溝址5の南西側、現地表面下約1.5mの地点で検出された。径約3mのやや歪んだ円形を呈する。遺構は、黄色砂質土を掘り込む。当初は、検出面の状況から土坑と思われたが、掘り下げたところ、南西寄りにわずかに焼土と炉縁石の一部を残す炉址を確認した。住居址覆土は、礫を含む暗褐色土の上に黒褐色がレンズ状に堆積する。炉址の覆土は黒褐色であった。炉址の存在から住居址としたが、締まった状態での床面は確認できず、柱穴も同様であった。黄色砂質土まで掘り下げたが、南東方向にやや傾斜しており、この面を床面とするには疑問が残る。規模からいっても、住居址というよりもむしろ一種の野外炉的なものである可能性も考えてみる必要もあろう。

遺物は少なく、図示した1の黒曜石の石核他には時期を確定できない縄文土器片が出土したのみであるが、遺構検出時に縄文時代中期の土器が出土しており、本址も時期的にはそれに近いものであろう。



挿図4 CTH 3号住居址

2) 土坑 (挿図5、第1図)

ここでは、遺物が出土したのものについてのみとし、その他については6)その他のところで記述する。

いずれも、簡易水路南西側で検出され、さらに南西では毛賀沢川による擾乱域に接する。

① 土坑86

規模1.4m×1mの不整楕円形を呈する。深さ20~40cmで底部はやや舟底状になる。礫を含む地山を掘り込んでいる。覆土は暗褐色土である。

遺物は、図示した沈線を施した底部の破片の他に、破片2点が出土したのみである。

時期は、縄文時代中期半ばである。

② 土坑87

規模1.4m×1mの不整楕円形を呈する。底部はやや傾斜しており、深さ20~50cmである。覆土は暗褐色土である。

遺物は、時期の特定できない土器破片が出土した。

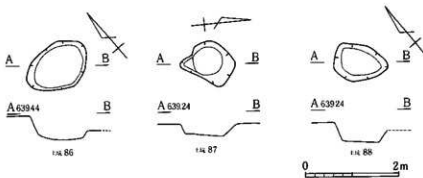
③ 土坑88

規模1.2m×0.8mの不整楕円形を呈する。底部は平坦で深さ30~40cmで、覆土は黒褐色土である。

遺物は、図示できないが土器片8点が出土した。

時期は、縄文時代中期にあたろう。

(渋谷恵美子)



挿図5 CTH 土坑86・87・88

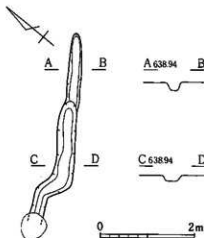
3) 溝 址

① 溝址 4 (挿図 6)

調査区中央、3号住居の南側で検出された。

総延長 4 m の比較的小規模な溝址で、南西端は小柱穴と重複する。そのすぐ東側で長軸方向を $N66^{\circ}E$ から $N72^{\circ}W$ に変え、すぐにまた方向を $N56^{\circ}E$ に戻す。幅 30~40 cm、深さ 10~17 cm を測る。底面のレベルは南西側が 26 cm ほど高い。底面はやや丸底状で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土で、底面付近に砂粒は認められない。

出土遺物はなく、時期不明であり、形態等から何等かの区画施設と考えられる。



挿図 6 CTH 溝址 4

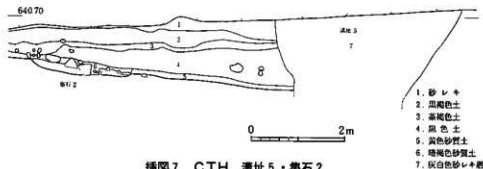
② 溝址 5 (挿図 7・9・10)

調査区中央北側、3号住居の北側に隣接して検出された。表土直下で確認されており、時期の新しい溝址と判断され、遺構検出面から下は掘り下げなかった。

本址の北西・南東側は調査区外に延びており、確認されたのは路線幅分にとどまる。幅は遺構確認面で 3.4 m を測る。長軸方向は $N38^{\circ}W$ を指し、傾斜に沿っている。壁は全体的に急な立ち上がりを示すが、北壁はやや緩やかである。埋土は大半が灰白色砂礫層であり、底面付近に漆黒土がやや厚く認められるが、下位の状態は不明である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明であるが、上層から検出されていることから新しい時期のものである。埋土や断面状態から、本址は自然流路と考えられる。

(馬場 保之)



挿図 7 CTH 溝址 5・築石 2

③ 溝址6 (挿図9)

調査区南東端の道路沿いに検出した。道路にかかるため、幅は不明である。一部の確認のため、遺物等の出土はなく時期も不明であるが、黄白色砂礫土を覆土とし、溝址5と同様に自然流路と考えられる。

(渋谷恵美子)

4) 集石

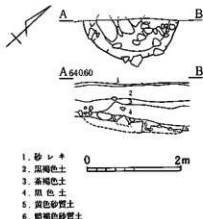
① 集石2 (挿図7・8)

調査区中央西側、一部調査区外にかかって検出された。

全体を調査しておらず、平面形・規模等詳細は不明であるが、大きさは2m前後かと思われる。掘り方底部まで25cm程度を測り、10~60cmの大きさの礫が集中する。特に大きい礫は西側半分に集中する。礫は花崗岩を主体とする。礫間に暗褐色砂質土が入る。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

(馬場 保之)



挿図8 CTH 集石2

5) その他

① 柱穴群 (挿図9・10)

溝址5の南東側から道路までの間は、道路に向かって緩やかに上り傾斜となっており、遺構は礫を含む黄色砂質土を掘り込む。いずれも遺物はなく何らの規則性も認められず、柱穴・貯蔵穴といった性格は不明である。

道路沿いの東西に長い遺構は、角礫を含む黒褐色土を覆土とし、礫は地山および流れ込みによるものである。さらに東西に溝状に延びるものと思われる西端の穴は、本址を掘り込んでいたが、やはり遺物の出土はない。

3号住居址周辺の遺構は黄色砂質土を掘り込む。この地点においても遺構内からの遺物の出土はなく、時代を特定しがたい。3号住居址西側の穴は、3号住居址に切られる。覆土は黄色混黒褐色土である。

溝址4を掘り込む穴も他と同様で、時期・性格等は不明である。覆土は黄色混黒褐色土である。

② 遺構外出土遺物

(第1図)

土器・石器共に出土量は少なく、時期のわかるものを中心に図示した。

A 土器

a. 縄文時代中期

3は口縁部で把手状になっている。5は円形刺突文、6・7は半截竹管文が施されている。他は沈線、縦の条線による施文となっている。

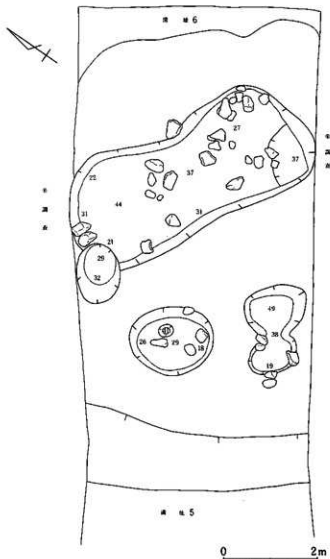
b. 縄文時代後期

30・31はそれぞれ深鉢の口縁部と頸部で、32・33とともに磨消縄文が施されている。

B 石器

34は硬砂岩製の横刃形石器、35は硬砂岩製の石鏃、36・37は硬砂岩製と緑色岩製の打製石斧である。その他に、図示していないが黒曜石の剥片が出土している。

(渋谷恵美子)



挿図9 CTH 周辺柱穴平面図(1)

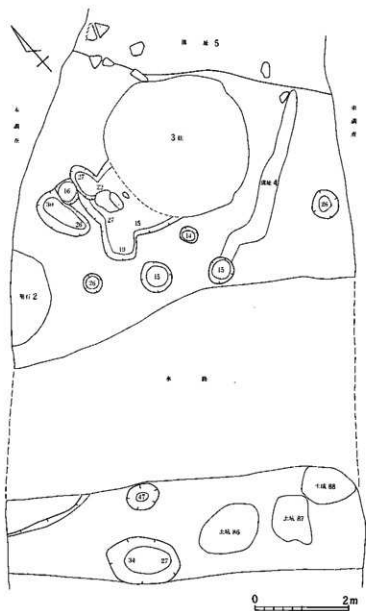


插图10 CTH 周边柱穴平面图(2)

2. 河原林遺跡

(1) 調査区の概要 (挿図11)

1) A 区

本区の北東側は毛賀沢川に接し、いわゆる洞が抜けた状態を示す。北東側の約 $\frac{1}{2}$ はやや緩やかな傾斜を示し、表土直下に礫混じりの黄褐色砂質層、以下砂礫層が検出される。B区に寄った南西側はやや傾斜が急になり、この傾斜の変換点付近には南東・北西方向に黒色土が帯状に分布していた。この黒色土は礫混じりの黄褐色砂質層の下に潜り、途中で確認できなくなる。

遺構・遺物は確認されなかった。

2) B～D区 (挿図28)

C区は十分に調査区を確保できないため、トレンチ状に設定した。本遺跡の遺構が大半検出されたのが、B～D区である。ローム層が安定的に分布している。C区付近が斜面の頂部にあたり、B・D区南西半は南側に下る斜面、B区北東半は東側に傾斜している。B区では1号住居址付近で傾斜が変換する。D区中央より南西側は上部がいわゆる三六災で土取りされ、南西端ではローム層は確認されない。

D区付近の基本層序は、耕土下に暗褐色土・黒色土・褐色土・暗黄褐色土であり、大半の遺構が暗黄褐色土上面から掘り込まれていると考えられる(挿図28)。

3) E 区

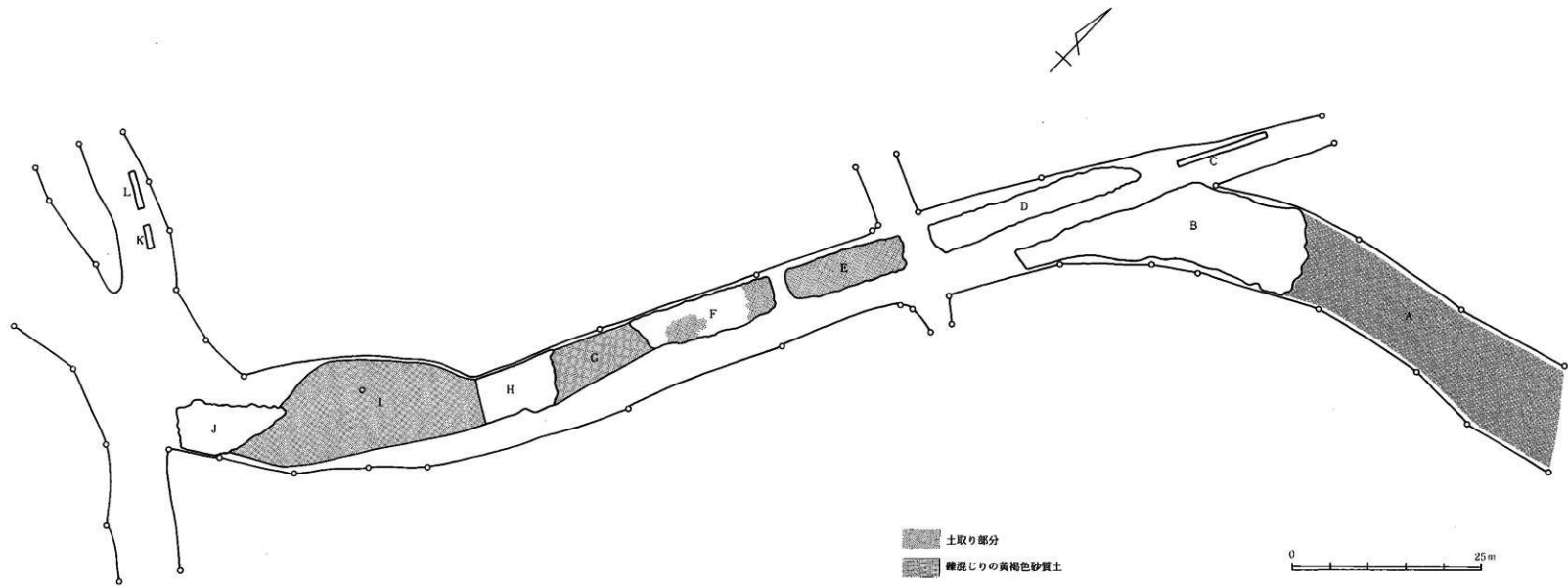
三六災にあたって大きく土取りされ、ローム層下の礫混じりの黄褐色砂質層まで土取りがおよぶ。現地表までの約2.5mの厚さを測る黒色土・黒土混褐色土は、土取り後に北西側の山麓が大きく切り土され、造成されたものである。本調査区の北東側端付近には、青灰色砂が帯状に分布する。方向は北西・南東方向に延びており、自然流路の痕跡と思われる。検出遺構・遺物はない。

4) F 区

畑管を挟んでE区の南西側に位置し、北東端はE区と同様、土取りされる。また、中央付近現道脇も土取りされる。ローム層が安定して遺存しており、調査区北西際に土坑が検出された。

5) G・I区

ローム層が全体に分布するが、締まりがなく、二次的な堆積状態を示すと判断された。下位の状態は確認していないが、埋め立てられたものと思われ、これに先立つ土取り作業が暗示される。



挿図11 KWH 調査区概要図

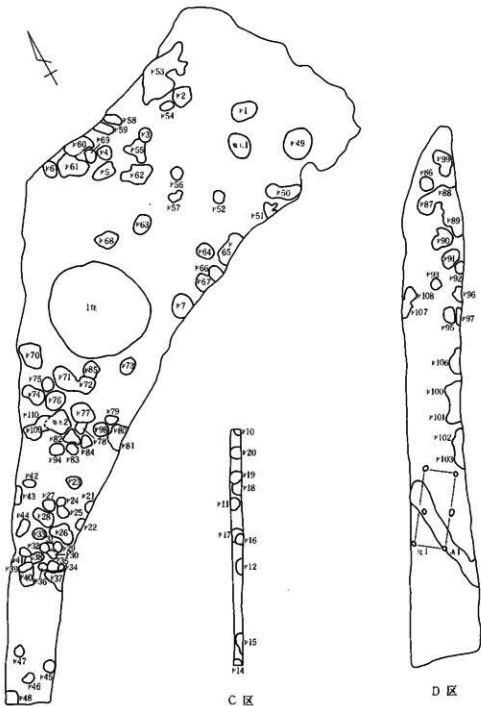


插图12 KWH 遺構全体图(1)

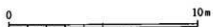
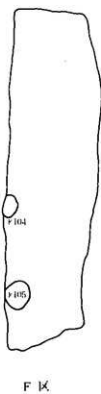
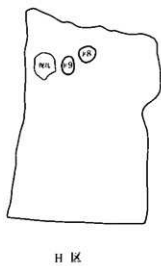
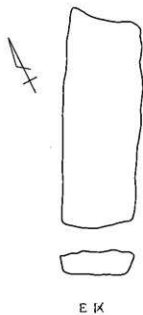


插图13 KWH 遺構全体図(2)

6) H 区

本区の北東側は約1.5mの深さまで土取りを受け、摺鉢状に凹む。南東側はローム層が遺存するのに対し、北西側はその下位の礫混じりの黄褐色砂質層が露出する。南東側ローム層は縮まっており、土坑壁面の状態からも一次的な堆積と判断された。

7) J 区

本区は土取りそのものはおよんでいないが、上部は重機により穴が掘られ、廃棄物が埋め立てられていた。このため遺構の遺存状態はきわめて悪い。ローム層は検出できず、その下位の礫混じりの黄褐色砂質層が露出している。一部深掘りした結果、盛り土ではないことを確認した。

8) K・L区

本区は現道を控え十分な調査面積を確保できないため、トレンチ状に設定した。K・L区の間は果樹園の進入路として確保した。また、J・K区の間はJ区西側端でより下位から廃棄物が確認されたことや現状から廃棄物の埋め立てが予測されたことから、調査からはずした。

地表下約20cmでローム層が検出される。しかし浅いため耕作がおよんだり、ごみ捨て穴が多数掘り込まれており、遺構の遺存状態は不良である。 (馬場 保之)

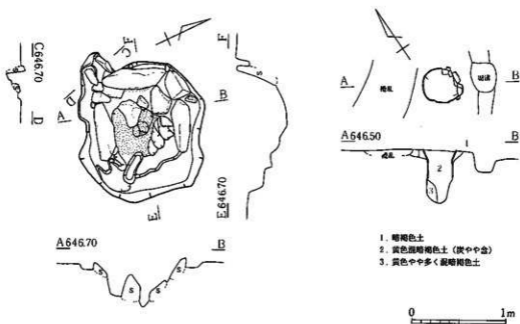
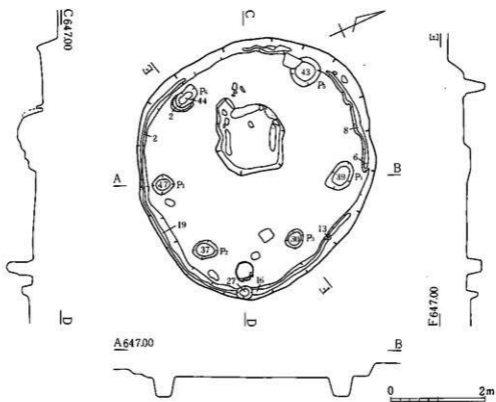
(1) 遺構と遺物

2) 竪穴住居址

① 1号住居址 (押図14、第2図・第3図)

B区ほぼ中央に検出された。遺構検出時点では、住居址東半分は攪乱のため炉址等は破壊されているものと思われたが、東側の壁の一部を削り取られたのみで、炉址・埋甕は比較的良好な状態にあった。周溝が住居址内をほぼ全周することから、規模は長径5.4m、短径5m、主軸方向N50.8°E、6本の支柱穴を有するやや不整形の竪穴住居址となる。住居址は、標高648m付近の東側に傾斜する斜面上に立地し、住居址の西側と東側とでは、比高差は現状で約30cmある。床面の西半分は比較的堅く締まっており、壁面も床より10cm程は同様に締まった状態が確認できた。それに対し、東側床面は締まりがなく、床面レベルをみてもやや東が低くなっており、上部の攪乱により若干削られたものであろう。

炉址は、1m四方の方形石囲炉である。東側の炉縁石の一部は、炉底に落ち込んでおり、抜き取り痕が確認できる。概ね残りは良い。炉址は、1.45m×1.2m、最深部で55cmある摺鉢状の穴を掘り込んで作られている。炉址内は、中央の堅く締まった焼土の上にブロック状の焼土と炭を含む黄色混茶褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積し、握り拳大の焼け石も含まれていた。炉縁石は、厚さ20cm、長さ60cm前後の比較的平たい花崗岩



挿図14 KWH 1号住居址

3石と30cm程の角礫で構成されている。上部の炉縁石の下には黄色土に半分埋まり込んだような状態で大ぶりの石があり、縁石が2段になる部分もある。前述の焼け石は、これら縁石のすきまを埋めるものであったと思われる。この炉址の特徴としては、本炉址の西側隅に30cm四方の小ぶりの石を方形に並べた副炉を持つことである。副炉は主炉と一体で作られたものであり、炉縁石は焼け、焼土もみられる。

埋壘は、東側で検出された。内傾する口縁部と胴下半部を欠く、縄文時代中期後葉の深鉢を正位置に埋設している。埋壘掘り方底部からは土器小破片が出土した。

遺物はそれほど多くはない。

土 器

第2図1は埋壘に使用されていた深鉢である。口縁部は欠損しているがキャバリー状に内傾し、波状を呈する。頸部に波状文、胴部二段に沈線文を施文し、縦の条線がほぼ全面に施されている。2は深鉢の口縁部で、頸部より櫛状工具による施文、二段の半截竹管文、その下に沈線と縦の条線による文様帯が続く。時期的には縄文時代中期後葉前半にあたるが、P5付近の西側壁際に上から落ち込んだような状態で出土しており、本住居址には伴わないと思われる。第3図1・2は沈線文、3～5は条線文、6は一部に縄文が施されている。7は土器の口縁部を利用した土製円板である。

石 器

第3図8・9は緑色岩製の打製石斧、10は緑色岩製の磨製石斧で全面に研磨痕がみられる。11は全面に調整痕のある敲打器である。

本住居址は、縄文時代中期後葉に比定される。

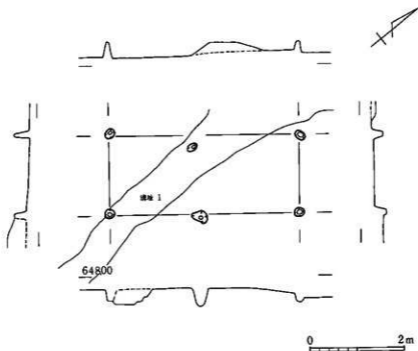
(渋谷恵美子)

2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址1 (挿図15、第3図)

D区やや南西側、一部調査区外にかかって検出された。溝址1を切る。

南東側は現道に、また北西側は調査区外にかかり調査されておらず、南東・北西方向の間数は不明である。南西・北東方向は2間を数え、柱穴の形態・規模等から総柱の掘立柱建物址と考えられる。南西・北東方向の規模は4.2m、柱間は約2.0mを測り、方向はN36°Eを示す。南東・北西方向の柱間はやや狭く、1.6mを測る。柱穴は径約20cmの不整円形を呈するが、南東辺中央の柱穴のみ長楕円形で長辺30cmを測り、他の柱穴の重複と考えられる。深さは9～45cmとばらつきがあり、また、底部レベルも揃わない。埋土は漆黒土である。北西辺中央の柱穴内部に10～20cm程度の角礫3個が底面より浮いた状態で確認された。



挿図15 KWH 掘立柱建物址 1

出土遺物は北西辺中央の柱穴内部角礫下から出土した打製石斧（第3図12）がある。硬砂岩素材で表皮をわずかにとどめ、全体に細かい剥離が施される厚手の石器である。基部を欠損し、混入と考えられる。

打製石斧のほか遺物はなく、詳細時期は不明であるが、規模や柱穴の形態、溝1との重複関係から中世以降の建物址と考えられる。

3) 土 坑

(1) 土坑1（挿図12）

B区で検出された。土坑2・49、集石土坑1と近接する。

140×92cm、深さ25cmを測る。不整楕円形を呈し、東側は一段深く凹む。複数土坑の重複とも考えられる。中央北側に35cm程度の礫が検出された。壁は北西側が緩やかな立ち上がりを示す。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

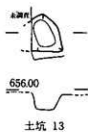
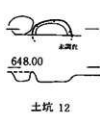
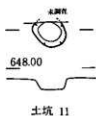
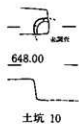
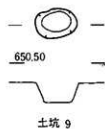
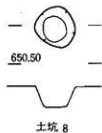
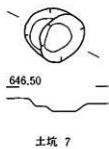
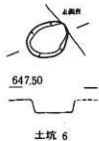
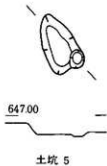
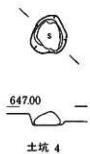
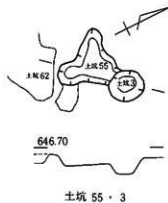


插图16 KWH 土坑1~13·55

〔2〕 土坑2 (挿図12)

B区北東側、土坑1・53・54と近接して検出された。

100×90cmの不整形を呈し、深さ24cmを測る。底部はほぼ平坦である。だらだらと掘り込んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土褐色土である。

出土遺物は縄文土器小破片3片である。うち1片は、沈線による区画文内部に縄文が充填される。

出土遺物から本址の時期は縄文時代中期後半に比定される。

〔3〕 土坑3 (挿図12)

B区北東側、土坑55と重複し、土坑54・58と近接して検出された。

70×70cmの不整形を呈し、深さ30cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期と考えられる深鉢無文部小破片と黒曜石微細削片各1片がある。

時期等詳細は不明である。

〔4〕 土坑4 (挿図12)

B区北東側、土坑5・55・59・69に近接して検出された。

柱穴と重複する。80×70cmの不整形を呈し、深さ9cmを測る。埋土は褐色土である。底部はほぼ平坦で、南・北側の壁はやや緩やかに、また、東・西壁はやや急に立ち上がる。坑内に約60cmの隙が底面に接して検出された。

出土遺物は、縄文土器微小片1片のみであり、詳細時期は不明である。

〔5〕 土坑5 (挿図12、第3図)

B区北東側、土坑4・61・62・69に近接して検出された。

125×70cmの不整形を呈し、深さ12cmを測る。底部は平坦であり、壁の立ち上がりは全体的に緩やかである。埋土は褐色土である。北東側に小柱穴が重複する。

出土遺物は縄文時代後期初頭の深鉢片(第3図13)がある。沈線間にRL縄文が施文される。雲母・石英等多量に含む。

出土遺物から縄文時代後期初頭に比定される。

〔6〕 土坑6 (挿図12)

B区北側調査区端、土坑60・61に近接して検出された。

90×70cmの不整楕円形を呈し、深さ15cmを測る。底部はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりの状態は急である。埋土は褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期と考えられる深鉢無文部1片のみである。

詳細時期・性格等は不明である。

〔7〕 土坑7 (挿図12)

B区中央東側調査区際、1号住居址・土坑67の中間で検出された。

125×110cmの不整形を呈し、深さ17cmを測る。東側は一段凹み、深さ24cmである。壁の立ち上がりの状態は全体的に緩やかである。埋土褐色土である。

出土遺物は縄文土器片、打製石斧各1点がある。深鉢片はRⅠ縄文が横位施文される。打製石斧は硬砂岩製で、基・身部を欠損し、刃部のみ遺存する。自然面はとどめていない。

出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と考えられる。

〔8〕 土坑8 (挿図12)

H区北東側、土坑9に近接して検出された。

不整形を呈し、規模85×80cm、深さ43cmを測る。底部は平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

〔9〕 土坑9 (挿図12)

H区北東側、土坑8に近接して検出された。地山の礫混りの黄褐色砂質層を掘り込む。不整形を呈する土坑であり、規模90×60cm、深さは37cmを測る。底部は北壁側に入り込むように掘り込まれており、他の部分は壁がほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

〔10〕 土坑10 (挿図16、第3図14)

C区北東端、大半が調査区外にかかって検出された。土坑20と近接する。

調査ができなかった部分が多く、平面形・規模等詳細は不明である。深さは44cmを測り、壁は急な立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物は縄文土器2片がある。第3図14は小破片で文様構成は不明であるが、隆沈線や押し沈線が施文される。内面に屈曲があり、頸部付近と思われる。他に内外面褐色を呈し、沈線施文の脆い破片がある。

出土遺物から縄文時代中期前半の土坑と考えられる。

[11] 土坑11 (挿図16)

C区中央やや北東寄り、土坑17・18の間に検出された。一部調査区外にかかる。

70×(60)cmの不整形円形を呈し、深さ16cmを測る。底部は平坦で、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物は縄文土器小破片1片がある。中期の深鉢と考えられるが、無文部であり、詳細は不明である。

[12] 土坑12 (挿図16)

C区中央、土坑15・16の間に検出された。一部調査区外にかかる。

約半分調査したのみで、平面形・規模は不明な点があるが、確認された部分では85cmであり、深さ21cmを測る。南西壁は急に立ち上がるのに対し、北東壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐色土である。

出土遺物は縄文土器1片がある。沈線が1条施されるが、内外面著しく器面荒れており、中期に属すると思われるが詳細は不明である。

[13] 土坑13 (挿図16、第3図15)

K区北西側、土坑114・115の間、一部調査区外にかかって検出された。上部は一部攪乱により壊されていた。

75×(70)cmの不整形形を呈し、深さ30cmを測る。底部はやや丸底に近く、壁は急な立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物は打製石器(第3図15)のみである。緑泥岩製で、刃部を欠損し、表裏面とも摩滅が著しい。

詳細時期等不明であるが、縄文時代中期の遺構と考えられる。

[14] 土坑14 (挿図17)

C区南西端で検出された。土坑15と近接し、大部分が調査区外にかかる。

一部を調査したのみで、平面形・規模等詳細は不明である。深さは10cmである。だからと掘り込んでおり、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[15] 土坑15 (挿図17)

C区南西側、土坑12・14の間で検出された。調査区外にかかり、約 $\frac{1}{2}$ を調査したにとどまる。

不整形を呈するが、全体形は不明であり、また、規模は判明する南北方向が115cmを測る。深さ12cmを測る。だからと掘り凹められ、底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土褐色土である。底部のレベルは一定であるが、形態から複数の土坑の重複とも考えられる。

[16] 土坑16 (挿図17)

C区中央、土坑17と重複し、土坑12と近接して検出された。一部調査区外にかかる。

55×(50)cmの不整形円形を呈し、深さ38cmを測る。底部はやや丸底状で、壁は緩やかに立ち上がり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。検出時は土坑17と同一と考えたが、掘り下げ後二つの土坑と判明したため、新旧関係は不明である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[17] 土坑17 (挿図17)

C区中央、土坑16と重複し、土坑11と近接して検出された。一部調査区外にかかる。

80×70cmの不整形円形を呈すると思われる、深さは16cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[18] 土坑18 (挿図17)

C区北東側、土坑19と重複し、土坑11と近接して検出された。調査区外にかかり、約 $\frac{1}{2}$ を調査したにとどまる。

未調査部分があり、また土坑19と重複するため、規模は不明である。平面形は概ね円ないし楕円形を呈するものと思われる。深さ19cmを測る。底部は平坦であり、壁の立ち

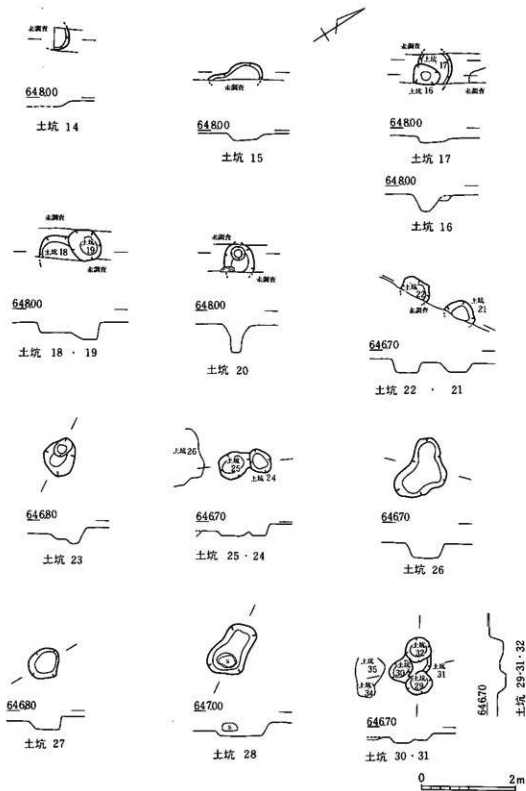


插图17 KWH 土坑14~32

上がりの状態は南西壁がほぼ直立するのに対し、北西壁はやや緩やかである。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[19] 土坑19 (挿図17)

C区北東側、土坑18と重複し、土坑20に近接して検出された。壁の一部は調査区外にかかるが、ほぼ全体を調査した。

75×(60)cmの不整楕円形を呈し、深さ35cmを測る。底部はほぼ平坦である。壁は片上がりで、南西側が緩やかであるのに対し、北東壁はほぼ垂直な立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。詳細時期・性格等は不明である。

[20] 土坑20 (挿図17)

C区北東側、土坑10・19の間で検出された。一部調査区外にかかる。

(75)×65cmの不整楕円形を呈し、深さ25cmを測る。北西側は径30cmの円形に一段凹み、深さは56cmである。壁の立ち上がりの状態は上部が緩やかであるのに対し、下部はほぼ垂直である。埋土褐色土である。上部からは塵が検出されたが、検出面よりかなり上位であり、本址に伴うものではない。

出土遺物はない。

[21] 土坑21 (挿図17)

B区南西側、土坑22～25に近接して検出された。調査区外にかかる。

不整形を呈すると思われる、規模65×(55)cm、深さ20cmを測る。だらだらと掘り込んでおり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[22] 土坑22 (挿図17)

B区南西側、土坑21・24～26に近接して検出された。調査区外にかかり、½程度を調査したにとどまる。

不整形を呈すると思われる土坑であり、規模60cm程度、深さは21cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは土坑21より急である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

(23) 土坑23 (挿図17)

B区南西側、土坑21・22・24・25・83・94の間で検出された。

不整楕円形を呈し、規模80×65cm、深さ14cmを測る。北西壁際に40×30cm程度の柱穴が重複し、深さは22cmである。壁は全体的に緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

(24) 土坑24 (挿図17)

B区南西側、土坑25と重複し、土坑21・23・27の間に検出された。

45×45cmの不整形円形を呈し、深さ13cmを測る。断面摺鉢状を呈する。埋土は褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

(25) 土坑25 (挿図17)

B区南西側、土坑24と重複し、土坑21・22・26～28の間に検出された。

不整楕円形を呈する土坑で、規模65×50cm、深さ13cmである。壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。埋土は他と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(26) 土坑26 (挿図17)

B区南西側、土坑22・25・28～33の間で検出された。

130×85cmの不整形を呈し、深さ21cmを測る。壁は全体的に急な立ち上がりを示す。底部レベルはほぼ揃うが、その形態から複数土坑の重複が考えられる。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

(27) 土坑27 (挿図17)

B区南西側、土坑24～26・28・42の間で検出された。

不整形円形を呈する土坑で、規模65cm×60cm、深さは26cmを測る。底部はほぼ平坦である。壁は片上がりで、北壁がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、他の壁は緩やかに立ち上

がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[28] 土坑28 (挿図17)

B区南西側、土坑24～27・33・42～44の間で検出された。

不整形を呈し、規模110cm×65cm、深さ22cmを測る。底部はほぼ平坦であり、壁は全体的にやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土で、南東側には底面より浮いた状態で約40cm程の大きさの礫が検出された。

出土遺物はない。

[29] 土坑29 (挿図17)

B区南西側、土坑30・31と重複し、土坑26に近接して検出された。

55×50cmの不整形円形を呈し、深さ27cmを測る。断面階鉢状を呈する。埋土は重複する他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

[30] 土坑30 (挿図17)

B区南西側、土坑29・31・32と重複し、土坑34～36・38と近接して検出された。

不整形円形を呈する土坑で、規模55×40cm、深さ21cmである。壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。埋土は他と同様、褐色土で、新旧関係は不明である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[31] 土坑31 (挿図17)

B区南西側、土坑29・30・32と重複し、土坑26・33に近接して検出された。

重複関係のため、平面形・規模等不明であり、深さは14cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりを示す。

出土遺物はない。

[32] 土坑32 (挿図17)

B区南西側で検出された。土坑30・31と重複し、土坑33・38・41と近接する。



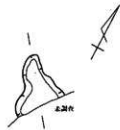
64700

土坑 33



64670

土坑 36 · 35 · 34



64670

土坑 37



64680

土坑 38



64680

土坑 39



64680

土坑 40



64680

土坑 41



64700

土坑 42



64700

土坑 43



64700

土坑 44



64680

土坑 45



64700

土坑 46



插图18 KWH 土坑33~46

不整形を呈する土坑で、規模55×50cm、深さ20cmである。底部はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは急である。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[33] 土坑33 (挿図18)

B区南西側、土坑26・28・29・31・32・41・44の間で検出された。

不整形円形を呈し、規模75×60cm、深さ21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。

[34] 土坑34 (挿図18)

B区南西側調査区際、土坑35と重複し、土坑37と近接して検出された。

40×30cmの不整形円形を呈し、深さ15cmを測る。底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は土坑35と同様褐色土で、新旧関係は不明である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[35] 土坑35 (挿図18)

B区南西側、土坑34・36と重複し、土坑30・37と近接して検出された。

不整形を呈する土坑であり、長軸方向の規模は重複のため不明である。短軸方向は60cm、深さは6cmを測る。底部は土坑34の側がやや低くなる。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[36] 土坑36 (挿図18)

B区南西側、土坑35と重複し、土坑30・37～40と近接して検出された。

50×45cmの不整形円形を呈し、深さ19cmを測る。底部は平坦であり、壁の立ち上がりの状態は全体的に緩やかである。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

(37) 土坑37 (挿図18)

B区南西側で検出された。土坑34・36・40と近接し、一部調査区外にかかる。

不整形を呈するが、全体形は不明であり、また、規模は判明する南北方向が110cmを測る。深さ12cmである。底部は平坦であるが、だらだらと掘り凹められており、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。不整形を呈することから、複数土坑の重複ないし耕作に伴うものと考えられる。

(38) 土坑38 (挿図18)

B区南西側、土坑39・41と重複し、土坑30・32・36の間で検出された。

不整形を呈し、規模95×50cm、深さ12cmを測る。底部は東側がやや低くなり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はない。

(39) 土坑39 (挿図18)

B区南西側土坑38・40と重複し、土坑36・41と近接して検出された。

80×40cmの不整形長方形を呈し、深さ27cmを測る。底部はやや丸底状で、壁は片上がりで西壁はさらに緩やかに立ち上がる。埋土褐色土で、土坑38・40と同一で新旧関係は不明である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(40) 土坑40 (挿図18)

B区南西側、土坑39と重複し、土坑36・37と近接して検出された。

不整でないし長方形を呈すると思われ、南北方向の規模は土坑39と重複するため不明であるが、東西方向は75cmを測る。深さは16cmである。底部はほぼ平坦で、東壁のたちはがりはやや緩やかであるのに対し、他は急である。

出土遺物はない。

(41) 土坑41 (挿図18)

C区南西側、土坑38と重複し、土坑32・33・42と近接して検出された。

平面形は不整形楕円形を呈するものと思われ、規模60×45cm、深さ19cmを測る。北東側は一段低く凹み、深さ26cmである。壁の立ち上がりの状態は全体的にやや急である。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

(42) 土坑42 (挿図18)

B区南西側中央寄り、土坑23・27・43・94と近接して検出された。

65×35cmの不整楕円形を呈し、深さ11cmを測る。中央やや南西寄りに小さく一段凹む。底部はほぼ平坦であり、壁は全体的に緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。出土遺物はない。詳細時期・性格等は不明である。

(43) 土坑43 (挿図18)

B区南西側中央寄り、土坑27・28・42・44の中間で検出された。一部調査区外にかかる。

95×(35)cmの不整長楕円形を呈し、深さ12cmを測る。底部は北側が低くなり、壁の立ち上がりも北側は急であるのに対し、それ以外はやや緩やかである。埋土褐色土である。出土遺物はない。

(44) 土坑44 (挿図18)

B区南西側中央寄り、土坑28・32・33・43に近接して検出された。

不整な草履形を呈し、規模100×45cm、深さ13cmを測る。だらだらと掘り込んでおり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。形態から複数の遺構の重複も考えられるが、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(45) 土坑45 (挿図18)

B区南西側端、土坑46・47に近接して検出された。

不整形を呈する土坑であり、規模60×60cm、深さは21cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がり、断面摺鉢状を呈する。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

(46) 土坑46 (挿図18)

B区南西側端、土坑45・47・48の間で検出された。

不整形を呈し、規模70×45cm、深さ16cmを測る。壁は全体的に緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

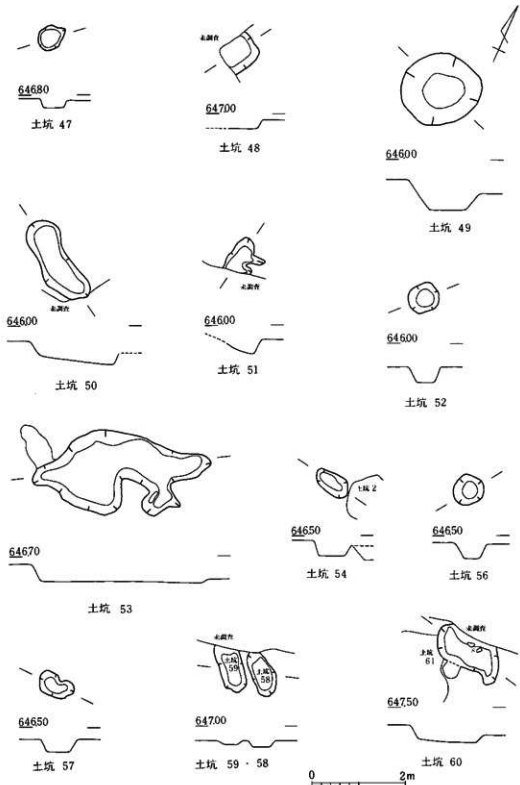


插图19 KWH 土坑47~54·56~60

(47) 土坑47 (挿図19)

B区南西側端、土坑45・46と近接して検出された。

60×50cmの不整形円形を呈し、北側にやや張り出しをもつ。深さ19cmを測る。底部は平坦で、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

(48) 土坑48 (挿図19)

B区南西側端、土坑46に近接して検出された。調査区外に大半がかかる。

調査できない部分が多く、平面形・規模等詳細は不明である。深さ19cmである。南東側の壁は立ち上がりの状態がやや緩やかである。埋土は他と同様、褐色土である。

出土遺物はない。

(49) 土坑49 (挿図19)

B区東北東端、土坑1・集石土坑1付近で検出された。

160×150cmの不整形円形を呈し、深さ48cmを測る。壁は全体的に緩やかな立ち上がりを示す。底部は平坦で断面摺鉢状を呈する。埋土は褐色土である。規模は他の土坑を圧倒する。

出土遺物はない。

(50) 土坑50 (挿図19)

B区北東側、土坑49・51、集石土坑1付近で検出された。一部調査区外にかかる。

不整形長楕円形を呈する土坑で、規模190×65cm、深さは18cmを測る。底部には南西側にかなりの傾斜で低くなる。壁は全体的にやや緩やかに立ち上がる。中央付近にくびれがあり、形態から複数の土坑の重複と考えられる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

(51) 土坑51 (挿図19)

B区北東側、土坑50・52・65の間で検出された。調査区外にかかる。

不整形を呈し、東側にはいくつか張り出しがあるが、調査区外にかかる部分が多いと思われ、平面形・規模等詳細は不明である。東西方向の規模は40cm、深さ15cmを測る。底部は北側に向かって大きく傾斜しており、壁はやや急な立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[52] 土坑52 (挿図19)

B区北東側、土坑50・51・56・57・64・65、集石土坑1の間で検出された。

70×60cmの不整形を呈し、深さ33cmを測る。断面摺鉢状を呈する。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

[53] 土坑53 (挿図19)

B区北東側端、土坑2・3・54・58と近接して検出された。一部調査区壁に接する。

不整形を呈する土坑で、規模380×170cm、深さ24cmである。壁の立ち上がりの状態は全体的にやや緩やかである。形態から少なくとも4つ以上の土坑の重複と考えられるが、埋土は褐色土の一層で、新旧関係不明であり、また、底部もほぼ平坦である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[54] 土坑54 (挿図19)

B区北東側、土坑2・53に近接して検出された。

規模80×40cmの不整形を呈する土坑で、深さは27cmを測る。底部は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。出土遺物はない。

[55] 土坑55 (挿図16)

B区北東側で検出された。土坑3と重複し、土坑4・5・53・54・58・59・62と近接する。

不整形を呈する土坑で、重複のため一部規模は不明であるが、南北方向は110cm、深さ11cmである。底部は南側にやや低くなり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は土坑3と同様、褐色土であり、新旧関係は不明である。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[63] 土坑56 (挿図19)

B区北東側、土坑3・52・54・55・62、集石土坑1の間で検出された。

不整形を呈し、規模70×65cm、深さ30cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。

[57] 土坑57 (挿図19)

B区北東側、土坑52・56・62～65の間で検出された。

75×40cmの湾曲した不整形を呈し、深さ38cmを測る。底部は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[58] 土坑58 (挿図19)

B区北東側、土坑3・53・55・59の間で検出された。一部調査区外にかかる。

不整長楕円形を呈する土坑であり、規模100×50cm、深さは13cmを測る。底部は平坦である。上部が削平されており、壁の立ち上がりの状態は不明であるが、やや緩やかであろう。埋土褐色土である。

出土遺物はない。

[59] 土坑59 (挿図19)

B区北東側、土坑3・4・55・58・60と近接して検出された。一部調査区外にかかる。

(115)×50cmの不整長楕円形を呈し、深さ80cmを測る。土坑58と同様、底部は平坦であり、上部が削平されて壁の状態は不明であるが、やや緩やかに立ち上がると考えられる。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[60] 土坑60 (挿図19)

B区北東側で検出された。土坑61と重複し、土坑59・69と近接して検出された。一部調査区外にかかる。

不整長方形を呈すると考えられ、南東側に張り出しがある。規模は155×(90)cm、深さ12cmを測る。底部は東側にやや低くなっており、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。調査区壁際に腰がやや浮いた状態で検出された。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[61] 土坑61 (挿図20)

B区北東側、土坑60と重複し、土坑4～6と近接して検出された。

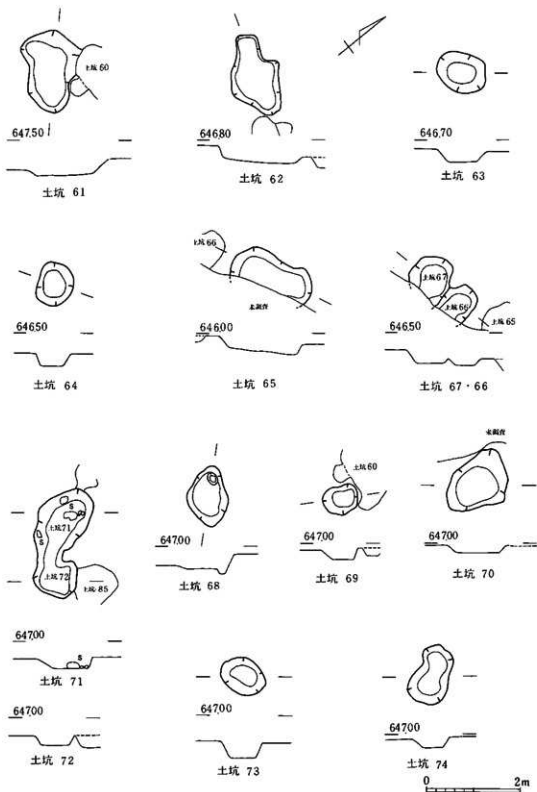


插图20 KWH 土坑61~74

不整形を呈し、規模170×100cm、深さ13cmを測る。底部は平坦であり、だらだらと掘り凹められ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は土坑60と同様、褐色土であり、新旧関係は不明である。形態から複数土坑の重複と考えられる。

出土遺物はない。

[62] 土坑62 (挿図20)

B区北東側中央寄り、土坑4・5・55～57・63・68の間で検出された。

180×100cmの不整形を呈し、北西側に張り出しを持つ。深さ13cmを測る。底部は東側が低くなる。壁は北西側の張り出す部分は急であるが、それ以外の部分は緩やかに立ち上がる。埋土褐色土である。平面形・壁の状態等から複数遺構の重複と考えられる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[63] 土坑63 (挿図20)

B区北東側中央寄り、1号住居址、土坑5・7・57・62・64・67・68の間で検出された。

不整形円形を呈する土坑で、規模105×85cm、深さ27cmを測る。底部はほぼ平坦で、断面摺鉢状を呈する。

出土遺物はない。

[64] 土坑64 (挿図20)

B区中央東側、土坑53・57・63・65～67の間で検出された。

平面不整形円形を呈し、規模90×70cm、深さ16cmを測る。壁の立ち上がりの状態は全体的にやや緩やかである。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[65] 土坑65 (挿図20)

B区中央東側、土坑64・66と近接して検出された。調査区外にかかる。

全体を調査していないが、ほぼ不整形円形を呈するものと思われ、南西北東方向175cm、深さ30cmを測る。底部は北東側が低くなる。また、壁は全体的に緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。ややくびれた部分があり、複数の土坑の重複とも考えられる。

出土遺物はない。詳細時期・性格等は不明である。

[66] 土坑66 (挿図20)

B区中央東側、土坑67と重複し、土坑64・65・67に近接して検出された。一部調査区外にかかる。

全体を調査しておらず、平面形は不明である。また、南北方向の規模も不明で、東西方向70cm、深さ13cmを測る。確認面から底部までは浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である。埋土褐色土である。

出土遺物はない。

[67] 土坑67 (挿図20)

B区中央東側、土坑66と重複し、土坑7に近接して検出された。調査区外にかかる。

不整形を呈すると考えられるが、重複関係や一部未調査のため詳細は不明である。規模は東西方向85cm、深さ28cmを測る。だらだらと掘り込んでおり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[68] 土坑68 (挿図20)

B区中央東側、1号住居址・土坑63の間で検出された。

不整形を呈する土坑であり、規模125×90cm、深さは19cmを測る。北西側は一段深く掘り込まれており、深さ30cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は南東側が緩やかであるのに対し、北西側は急に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[69] 土坑69 (挿図20)

B区北東側、土坑4・5・60・61に近接して検出された。

不整形円形を呈し、規模75×60cm、深さ20cmを測る。断面槽鉢状を呈する。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[70] 土坑70 (挿図20)

B区中央、1号住居址、土坑71・74・75の間で検出された。

140×90cmの不整形を呈し、北側にやや張り出しをもつ。深さ15cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

[71] 土坑71 (挿図20)

B区中央、土坑72と連続し、1号住居址、土坑70・75・76・85に近接して検出された。

不整形楕円形を呈し、土坑72と連続する部分まで約320cmを測る。短辺は105cm、深さ19cmである。壁は全体的に緩やかに立ち上がる。埋土は他と同様、褐色土で、坑内に塵が浮いた状態で検出された。

出土遺物はない。

[72] 土坑72 (挿図20)

B区中央、土坑71・85と重複し、土坑77と近接する。

90×(75)cmの不整形を呈し、深さ22cmを測る。底部平坦で、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[73] 土坑73 (挿図20)

B区中央、1号住居址と近接して検出された。

不整形円形を呈する土坑で、規模95×75cm、深さは30cmを測る。断面摺鉢状を呈する。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[74] 土坑74 (挿図20)

B区中央西側、土坑70・75・76・109・110の間で検出された。

不整形を呈し、中央近くにくびれがある。規模130×65cm、深さ16cmを測る。底部はくびれの両側で差はなく、ほぼ平坦である。南側は全体的に壁の立ち上がりが緩やかである。埋土は褐色土である。形態から土坑の重複とも考えられる。

出土遺物はない。

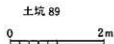
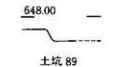
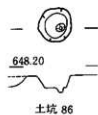
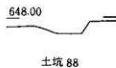
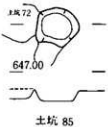
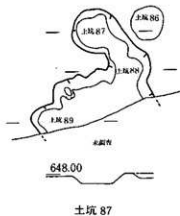
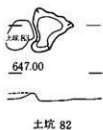
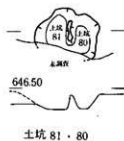
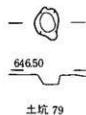
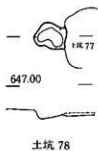
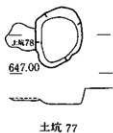
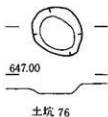
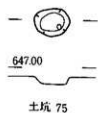


插图21 KWH 土坑75~89

(75) 土坑75 (挿図21)

B区中央西側、土坑70・71・74・76の間で検出された。

75×60cmの不整楕円形を呈し、深さ24cmを測る。底部平坦で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

(76) 土坑76 (挿図21)

B区中央西側、土坑71・72・74・75・77・110、集石土坑2と近接して検出された。

不整楕円形を呈する土坑で、規模110×90cm、深さ26cmを測る。だらだらと掘り込まれており、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(77) 土坑77 (挿図21)

B区中央やや南西寄り、土坑78と重複し、土坑71・72・76・79・98、集石土坑2と近接して検出された。

規模130×100cmの不整楕円形を呈する土坑で、深さは26cmを測る。底部は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。出土遺物はない。

(78) 土坑78 (挿図21)

B区中央やや南西寄り、土坑77と重複し、土坑82・84・98、集石土坑2と近接して検出された。

不整形を呈する土坑で、規模70×50cm、深さ14cmである。底部は土坑77の側がやや高くなる。壁の立ち上がりはやや緩やかである。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

(79) 土坑79 (挿図21)

B区中央やや南側、土坑77・80・98に近接して検出された。

不整形を呈し、規模70×50cm、深さ20cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、断面摺鉢状を呈する。埋土褐色土である。

(80) 土坑80 (挿図21)

B区中央南側、土坑81と重複し、土坑77・98と近接して検出された。一部調査区外にかかる。

(105)×50cmの不整形を呈する土坑で、深さ26cmを測る。底部は平坦である。壁は片上がりで、土坑81側はほぼ直に立ち上がるのに対し、南東側は緩やかである。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(81) 土坑81 (挿図21)

B区中央南側、土坑80と重複し、土坑78・98と近接して検出された。調査区外にかかる。

不整形を呈する土坑と思われ、規模(105)×70cm、深さは22cmを測る。土坑80とは反対側に片上がりであり、底部レベルも揃う。壁の状態から、本来、土坑80と同一の土坑であり、掘り足りなかった可能性がある。

出土遺物はない。

(82) 土坑82 (挿図21)

B区中央南西側、土坑78・83・84・94、集石土坑2と近接して検出された。

90×70cmの不整形を呈し、深さ22cmを測る。北東側は上部を削平されて壁の状態は不明であるが、全体的に緩やかに立ち上がると考えられる。埋土は他の土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

(83) 土坑83 (挿図21)

B区中央南西側で検出された。土坑23・82・84・94と近接する。

不整形円形を呈し、規模は70×55cm、深さ14cmを測る。断面摺鉢状を呈し、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(84) 土坑84 (挿図21)

B区中央南西側、土坑78・82・83・98と近接して検出された。

不整形を呈し、規模70×55cm、深さ22cmを測る。底部は平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。

出土遺物はない。

[85] 土坑85 (挿図21)

B区中央、土坑72と重複し、1号住居址、土坑71・73の間で検出された。

90×70cmの不整形を呈し、深さ23cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。埋土褐色土で、土坑72との新旧関係は判断できなかった。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[86] 土坑86 (挿図21)

D区北東端、土坑87・88・99の間で検出された。

不整形円形を呈する土坑で、規模70×70cm、深さ12cmを測る。底部はほぼ平坦で、中央やや東側は一段凹み、深さ22cmを測る。

出土遺物はない。

[87] 土坑87 (挿図21)

D区北東側、土坑88と重複し、土坑86・89・90の間で検出された。

平面不整形を呈する。深さ18cmを測る。だらだらと掘り込まれ、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。埋土は重複する土坑88と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[88] 土坑88 (挿図21)

D区北東側、土坑87・89と重複し、土坑86・99に近接して検出された。一部調査区外にかかる。

重複関係のため、平面形・規模等明らかでない。深さ24cmを測る。土坑87と同様、だらだらと掘り込まれ、壁の立ち上がりの状態は緩やかである。

出土遺物はない。詳細時期・性格等は不明である。

[89] 土坑89 (挿図21)

D区北東側、土坑88と重複し、土坑87・90・91に近接して検出された。一部調査区外にかかる。

全体を調査しておらず、平面形・規模等詳細は不明である。深さ17cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、底部はやや凸凹がある。埋土褐色土である。

出土遺物はない。

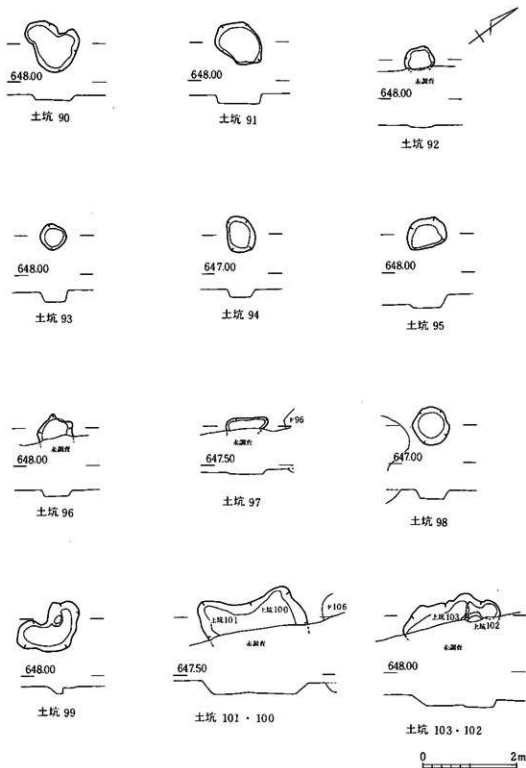


插图22 KWH 土坑90~103

[90] 土坑90 (挿図22)

D区北東側、土坑87・89・91の間に検出された。

不整形を呈し、規模は120×100cm、深さ13cmを測る。底部は平坦で、やや緩やかに壁が立ち上がる。埋土褐色土である。複数土坑の重複と考えられる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[91] 土坑91 (挿図22)

D区北東側、土坑90・92・93の間に検出された。

不整楕円形を呈する土坑であり、規模110×75cm、深さは17cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[92] 土坑92 (挿図22)

D区北東側、土坑91・93・96に近接して検出された。一部調査区外にかかる。

不整円形を呈すると思われる土坑で、規模65×(50)cm、深さ7cmを測る。上部を削平され、壁の立ち上がりの状態は不明である。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[93] 土坑93 (挿図22)

D区北東側、土坑91・92・95～97・107・108の間に検出された。

60×55cmの不整円形を呈し、深さ23cmを測る。底部はほぼ平坦で、断面槽鉢状を呈する。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

[94] 土坑94 (挿図22)

B区中央南西寄り、土坑82・83に近接して検出された。

不整楕円形を呈し、規模75×60cm、深さ18cmである。壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は他と同様、褐色土である。

出土遺物はない。

[95] 土坑95 (挿図22)

D区中央北東寄り、土坑93・96・97・106・108の間で検出された。

85×60cmの不整形を呈し、深さ7cmを測る。底部平坦で、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[96] 土坑96 (挿図22)

D区中央北東寄り、土坑92・93・95・97の間で検出された。

一部調査区外にかかり、平面形・規模等詳細は不明であるが、おおむね不整形を呈するものと思われる。南西北東方向の規模は70cm、深さは12cmを測る。一部壁が覆い被さる。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

[97] 土坑97 (挿図22)

D区中央北東側、土坑95・96・106の間で検出された。調査区外にかかる。

不整形の土坑で、南西北東方向の規模は90cm、深さ4cmを測る。確認面から底部までは浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である。埋土は褐色土である。

出土遺物はない。

[98] 土坑98 (挿図22)

B区中央南寄り、土坑77～81・84の間で検出された。

80×75cmの不整形円形を呈し、深さ18cmを測る。底部平坦で、ただらと掘り込まれ、壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土は土坑と同様、褐色土である。

出土遺物はなく、詳細は不明である。

[99] 土坑99 (挿図22)

D区北東端、土坑86・88と近接して検出された。

「く」の字形に屈曲する不整形を呈する土坑で、規模120×110cm、深さ15cmを測る。北西側が一段低く凹む。底部レベルはほぼ揃うが、形態からふたつの土坑の重複と考えられる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[100] 土坑100 (挿図22)

D区中央、土坑101と重複し、土坑106と近接して検出された。調査区外にかかる。全体を調査しておらず、また、重複のため、平面形・規模等詳細は不明である。深さは21cmを測る。土坑101と同様、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

[101] 土坑101 (挿図22)

D区中央、土坑100と重複し、土坑102と近接して検出された。調査区外にかかり、平面形・規模等不明である。深さ21cmである。底部は土坑100の側がやや高くなる。壁の立ち上がりはやや緩やかである。出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[102] 土坑102 (挿図22)

D区中央、土坑103と重複し、土坑101に近接して検出された。調査区外にかかる。重複関係等のため平面形・規模は不明であり、深さ10cmを測る。内部に一段凹む部分がある。土坑103底部より低く掘り込まれており、別の土坑と判断した。壁は急な立ち上がりを示し、土坑103と異なる。いずれも埋土褐色土で、新旧関係不明である。

[103] 土坑103 (挿図22)

D区中央、土坑102と重複し、掘立柱建物址1と近接して検出された。一部調査区外にかかる。平面形・規模とも不明である。深さ22cmを測る。底部は平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

[104] 土坑104 (挿図22)

F区中央南西側、一部調査区外にかかって検出された。不整形円形を呈する土坑と思われる、規模120×(90)cm、深さは46cmを測る。底部は北東側にかなり深くなる。壁は片上がりであり、深い北東側がほぼ直に立ち上がるのに対し、それ以外はやや緩やかである。埋土褐色土である。出土遺物はない。

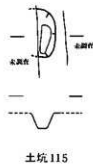
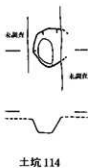
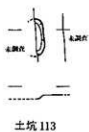
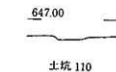
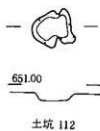
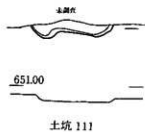
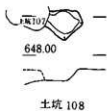
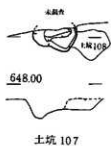
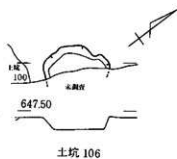
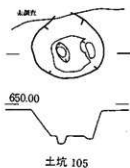
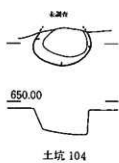


插图23 KWH 土坑104~115

0 2m

〔105〕 土坑105 (挿図23)

F区南西側、一部調査区外にかかって検出された。

150×(135)cmの不整形円形を呈し、深さは54cmを測る。内部は2ヶ所が一段凹む。壁の状態は、西側が緩やかに立ち上がるのに対し、東側は急な立ち上がりを示す。埋土は褐色土である。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

〔106〕 土坑106 (挿図23)

D区中央で検出された。土坑95・97・100と近接し、調査区外にかかる。

平面不整形を呈すると思われるが、約 $\frac{1}{2}$ を調査したのみで詳細は不明である。南西北東方向の規模は140cm、深さ24cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁の立ち上がりの状態はやや緩やかである。

出土遺物はなく、時期等は不明である。

〔107〕 土坑107 (挿図23)

D区北東側中央寄り、土坑108を切って検出された。調査区外にかかる。

不整形を呈すると思われ、南西北東方向の規模90cm、深さ17cmを測る。内部は一段低くなり、深さ35cmである。壁は直に立ち上がる。埋土は漆黒土の一層で他と大きく異なる。

出土遺物はない。

〔108〕 土坑108 (挿図23)

D区北東側、土坑107に切られて検出された。

(85)×65cmの不整形を呈し、深さ17cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。埋土褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

〔109〕 土坑109 (挿図23)

B区中央南西寄り、土坑110と重複して検出された。

不整形を呈する土坑で、南北方向の規模は80cm、深さ28cmを測る。底部はほぼ平坦である。だらだらと掘り込んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はない。

[110] 土坑110 (挿図23)

B区中央南西寄り、土坑109・集石土坑2と重複して検出された。

重複関係のため平面形・規模等詳細は不明である。南北方向は75cm、深さ28cmを測る。埋土は重複する他遺構と同様、褐色土であり、新旧関係は不明ある。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

[111] 土坑111 (挿図23)

J区中央攪乱跡、調査区外にかかって検出された。

一部を調査したのみで、平面形・規模等明らかでない。深さ4cmを測る。だらだらと掘り込む。

[112] 土坑112 (挿図23)

J区中央南東側で検出された。

不整形を呈し、規模は80×70cm、深さ13cmを測る。検出面は礫混りの黄褐色砂質層であり、掘り上がりも歪む。底部はやや凹凸がある。埋土褐色土である。

出土遺物はない。

[113] 土坑113 (挿図23)

L区中央、土坑115に近接し、調査区外にかかって検出された。

一部を調査したにとどまり、平面形・規模等詳細は不明である。深さ7cmを測る。上部を攪乱により壊される。埋土褐色土である。

出土遺物はない。

[114] 土坑114 (挿図23)

K区東側、土坑13に近接し、調査区外にかかって検出された。

不整形を呈すると思われる土坑であり、規模80×(70)cm、深さは29cmを測る。南壁は急に立ち上がるのに対し、北壁は緩やかである。

出土遺物はなく、時期・性格等不明である。

〔115〕 土坑115 (挿図23)

L区中央東側、土坑113に近接して検出された。調査区外にかかる。

平面形・規模等詳細は不明である。南東北西方向の規模100cm、深さ32cmを測る。上部をゴミ穴等の攪乱に壊される。埋土は褐色土である。

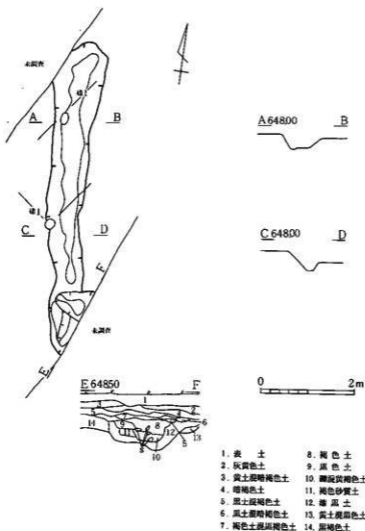
出土遺物はない。

4) 溝 址

① 溝址1 (挿図24、
第3図16・17)

D区で検出された。掘立柱建物址1に切られ、南北両端は調査区外に延びる。

遺構確認面まで40cm程度削平しており、底部付近を調査したにとどまる。幅64~100cmを測り、検出した部分の長さは8.4mである。やや蛇行するものの、長軸方向は $N8^{\circ}W$ を示し、傾斜の方向に沿う。溝底面はやや丸みを帯びるものの、ほぼ平坦であり、ところどころ水が巻いて低く凹んだ部分がある。調査区壁と斜交するためはっきりとしないが、



挿図24 KWH 溝址1

断面観察結果では緩やかな立ち上がりを示すものと思われ、上部はさらに緩やかになる。埋土は、確認面では黒色土であるが、断面では上部に漆黒土が観察された。床面直上にはところどころ黄褐色の砂層が約5cmの厚さで分布する。

出土遺物は、縄文時代中期・後期初頭の土器小片、剥片石器等がある。16は沈線の下位に細かい縄文が施文され、後期初頭に比定される。17は硬砂岩素材であり、他に緑色岩製の剥片石器がある。

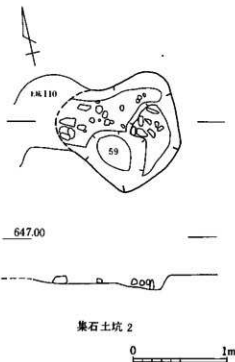
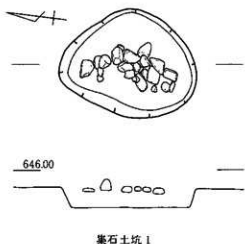
出土遺物は他時期の混入と考えられ、本址に伴うものではない。時期等詳細は不明であるが、中世以降と考えられる建物址1に切られており、これより古い時期の溝址である。方向・断面形および底面の状況等から、自然流路ないし毛賀沢川から引かれた小井水と考えられ、井水とすればその上限も古代末以降と考えられる。

(馬場 保之)

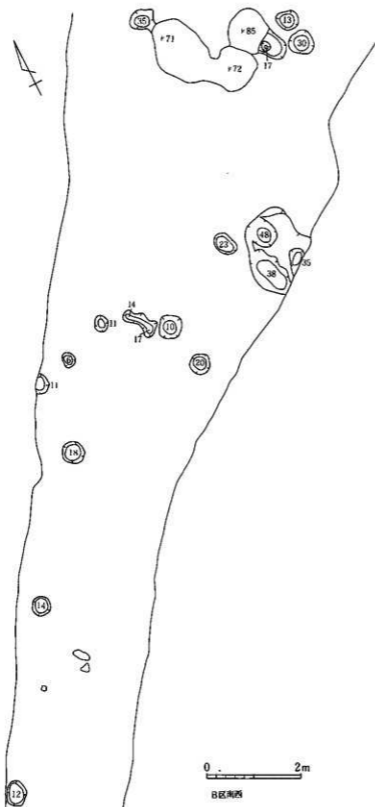
5) 集石土坑 (挿図25)

① 集石土坑 1

調査区のB区東側隅で検出した。規模1.45m×1.15m、深さ40cmの土坑内に1m×0.5mの範囲で底部より15cm程浮いた位置に握り拳大の石の集中がみられた。遺物等の出土はなく、土坑埋没時の流れ込みによるものであろう。



挿図25 KWH 集石土坑 1・2



挿図26 KWH 周辺柱穴平面図(1)

② 集石土坑 2

調査区B区、土坑74・76~78・82・109・110の間で検出された。約1.3mの不整形を呈する土坑内より集中して10~20cm程の花崗岩の礫が検出された。集石土坑1と同様に遺物はなく、時期不明ある。

6) その他

① 柱穴群 (挿図26・27・28・29)

土坑以外のものについては、B・C・D・J区において径40~60cm前後の不規則な穴が検出された。深さは10~60cmまでのものがあり、形態も不規則で、建物址の可能性も否定できないが、遺物の出土もなく、時代・性格は不明である。

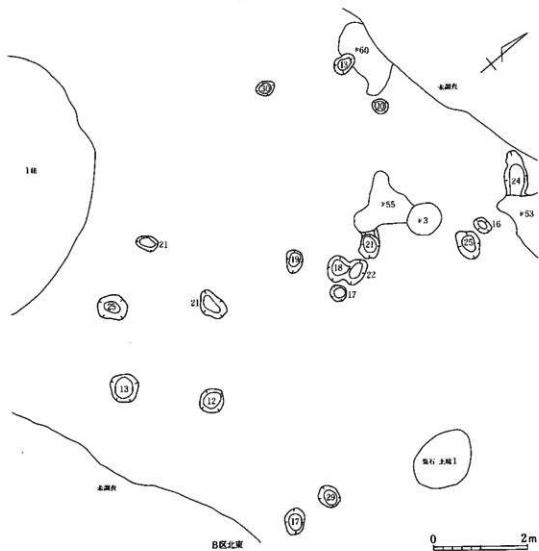
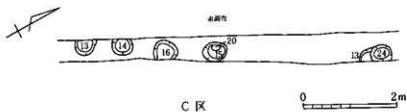
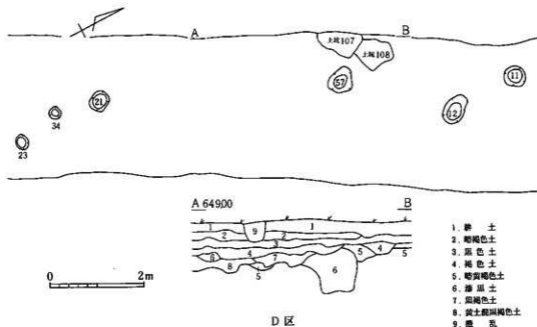
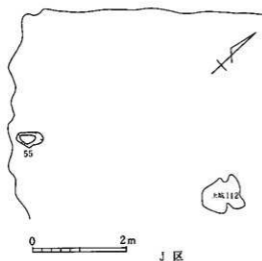


插图27 KWH 周边柱穴平面图(2)



挿図28 KWH 周辺柱穴平面図(3)



挿図29 KWH 周辺柱穴平面図(4)

② 遺構外出土遺物 (第4区)

A 土器

a. 縄文時代中期

中期中葉のものは、1～5、8～15
で沈線や縦の条線を施したものがある。
6・7は中期後葉の深鉢の胴部破片で
結節縄文が施されている。

b. 縄文時代後期

磨消縄文を施文した16がある。
その他に縄文を施文した土器破片を
利用した土製円板(17)がある。

B 石器

18は緑色岩製の打製石斧、19～22は硬砂岩製の横刃形石器で、自然面を最大限に利用し刃部に調整を加えたもの(19～21)と全面調整がされているもの(22)の二種がある。この他には、図示していないが、黒曜石の剥片が出土している。

IV ま と め

遺跡は中央アルプス前山の笠松山麓から発達する大扇状地の上面南端に位置する。

直刀原遺跡の今回の調査区は、現地地形では標高640～642m、北西から東南方向に傾斜する地域にあたる。毛賀沢川に近く、川の氾濫等による影響を受けていることが予想され、自然流路が確認されている。このような自然流路は前回のB区の調査の最には確認されておらず、A区市道沿いの溝址6と対岸の河原林遺跡内における川沿いの荒れた状況から、川は約100mの範囲内で流路の変動があったと思われる。また、調査の結果、遺構検出面である黄色砂質土の地山は、毛賀沢川から調査区中央に下降しており、最も深い所で現地表下約1.6m、ここから市道に向かって上り傾斜となることから、少なくとも縄文時代においては地形は現在とかなり異なっていたことが予想される。最深部付近で確認された3号住居址は、住居址としては否定的な面があるが、川の変動を避けながら川沿いに残された生活の痕跡は、ある程度長期にわたる住居地ではなく、川を対象とした生業にかかわる一時的あるいは季節的な施設であったとも考えられる。

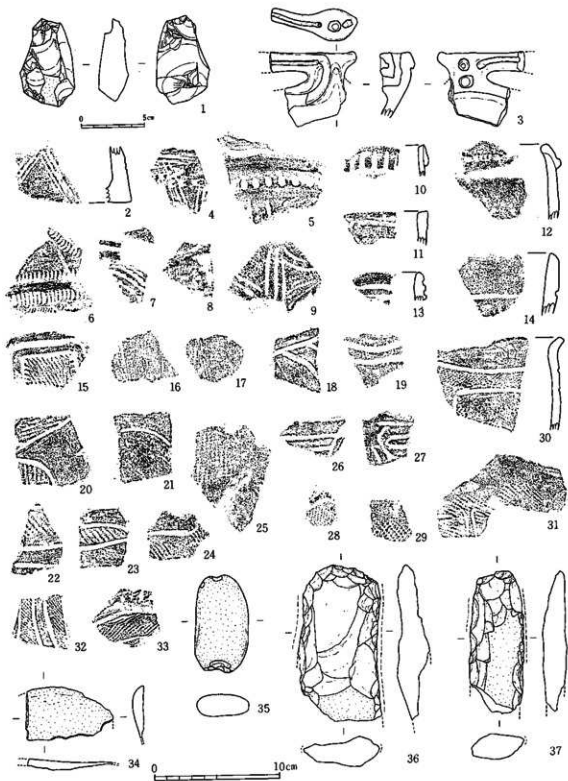
河原林遺跡の位置する地域は、扇状地南端部と毛賀沢川にはさまれた東西に細長い場所であり、東に向かうに従って毛賀沢川と扇状地端部は接近し、標高600m、調査地点から約400mの地点で交差する。西側は笠松山麓へとつながり、標高660m以上では傾斜も急になる。今回の調査地点は標高640～660m、川から扇状地端部までは200m程あり、この地域としては比較的条件の良い所といえる。しかし、川沿いのしかも調査区中央を走る道路より上の部分は三六災害後にかなり埋め立て用の土を取ったということで、遺跡の状態としては良いとはいえないが、唯一確認された竪穴住居址は、副炉を有するしっかりした方形石囲炉を備えており、この地に縄文時代中期を中心とする集落址が存在していたであろう事は十分予想できる。縄文時代後期については、若干の遺物のみで状況は不明と言わざるを得ないが、周辺地域では小規模ながらも後期の遺跡が知られており、今後の調査に期待したい。縄文時代以降の様相は、時代を特定できない建物址のみであるため、詳細は不明である。やはり今後の調査に待ちたい。

両者共に遺跡全体から見れば極一部の調査ではあるが、西部山麓地域という傾斜地における居住形態の在り方を、川を対象とした縄文時代人の生活手段の問題も含めて考えていく上で重要な遺跡であると言える。

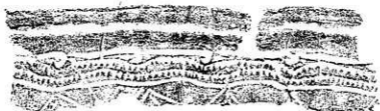
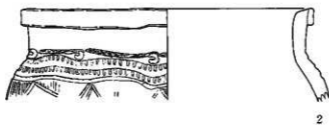
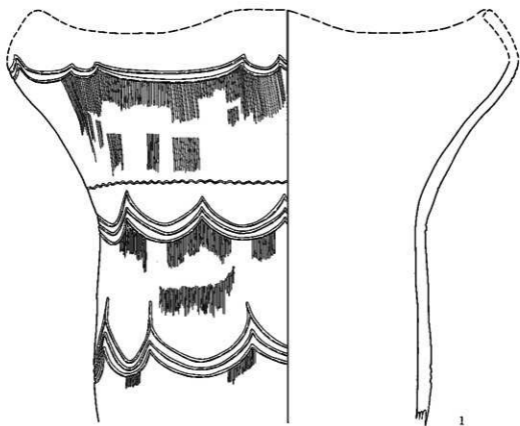
(渋谷恵美子)



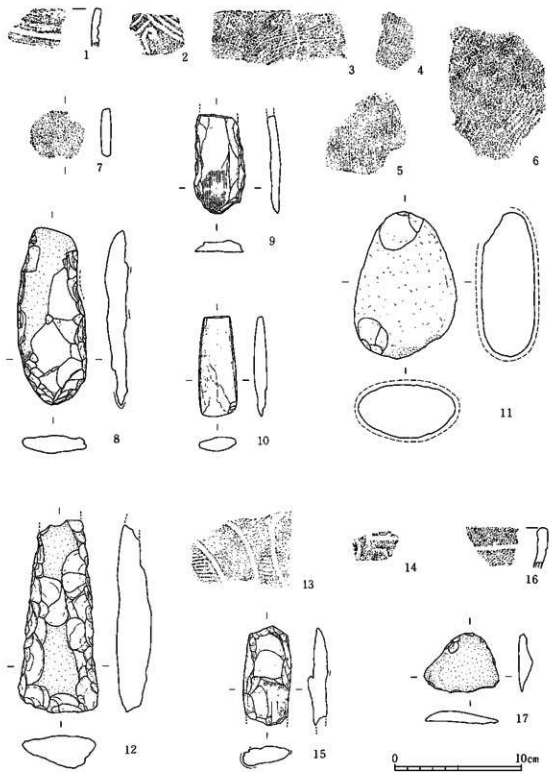
版



第1图 CTH 3号住居址、土坑86 道橋外出土遺物

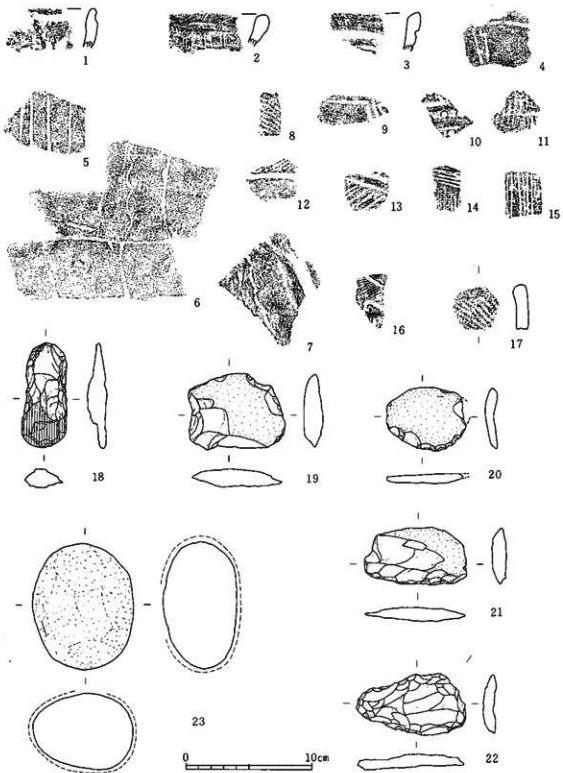


第2图 KWH 1号住居址出土土器



(1~11 1住 12 建1 13 F5)
 (14 F10 15 F13 16-17 土坑)

第3图 KWH 1号住居址、掘立柱建物址1、土坑5·10·13 溝1出土遺物



第4圖 KWH 遺構外出土遺物

写 真 图 版



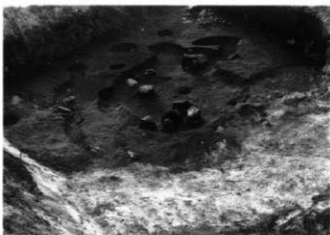
直刀原遺跡

3号住居址全体

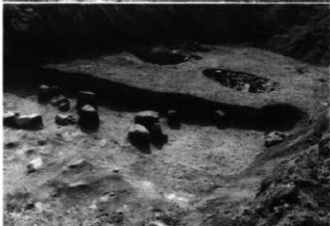


同 炉 址

3号住居址周辺

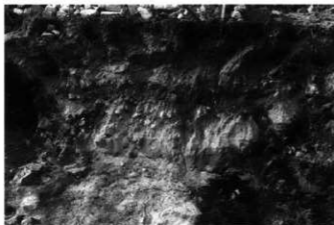


調査区北東隅より



土坑86・87・88

図版 3



溝址 5



溝址 4



集石 2

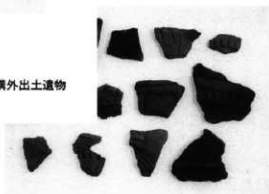
3号住居址

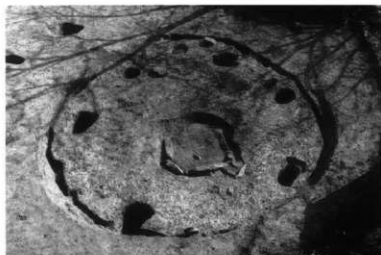


土坑86



道橋外出土遺物





河原林遺跡

1号住居址全体



同 埋 壘



同 埋 壘

1号住居址炉址



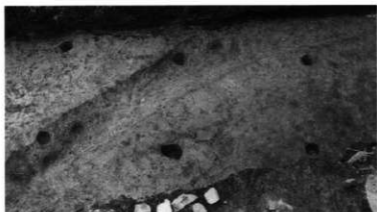
同 上



同 副 炉



图版 7



掘立柱建物址 1



溝址 1



同断面

集石土坑 1



集石土坑 2



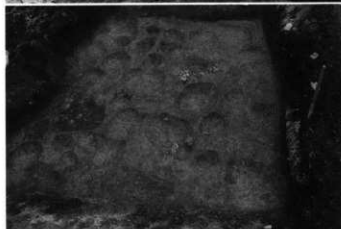
A区西より



図版 9



B区西より



B区中央

B区南より





C区北より



D区北より



E区

图版11



F区

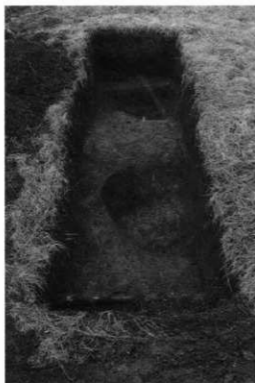


H区



I区

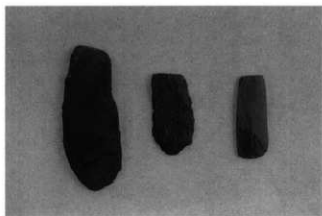
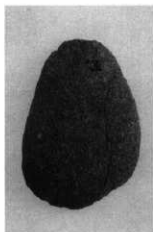
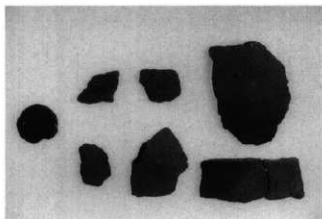
J区



K区



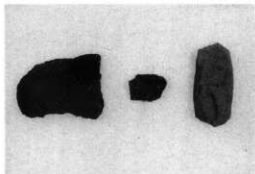
L区



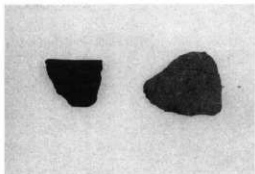
1号住居址出土遺物



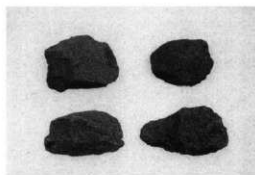
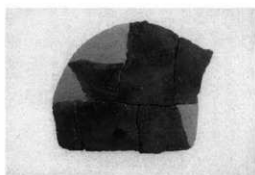
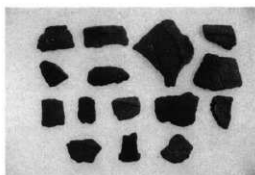
獨立柱建物址1
出土遺物



土坑 5 · 10 · 13



溝 址 1



遺構外出土遺物

重機作業風景



発掘作業風景



同 上



農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業(西部山麓2期地区)
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

直刀原遺跡 河原林遺跡

1992年3月印刷・発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印刷 長野県下伊那郡上郷町黒田786番地
杉本印刷有限会社

